










## ENCOUNTER

Nojima

## 出会いの広場 No.10 1990.1

## 特集・教育とエンカウンター・グループ

## 10号の主な内容

- 
- 特集・教育とエンカウンター・グループ 
    - 教師教育とエンカウンター・グループ……………野島 一彦 
    - 養護教諭とエンカウンター・グループ……………永原 伸彦 
    - 看護教育におけるエンカウンター・グループの  
現状と問題点……………鈴木 正子 
    - 大学生とエンカウンター・グループ……………斎藤 憲二 
    - 下山 晴彦
    - 大学生にとってのエンカウンター・グループ経験…山田 俊介 
    - 高校生のためのグループ合宿……………関 丕 
  - 連載・第1回
    - ゲシュタルト・セラピーの訓練を  
受けにいった時の話……………福井 康之
  - 出会い百選(7)
    - 『金沢ヒューマニステック・関 丕さん』……………畠瀬 直子
  - メッセージ・私の声
    - 言葉の向こうの風景……………水田 勲
    - 清里を想う……………中坪千夏子
    - 私の今いる所……………小泉 周二
    - '89. 3. 宮浜……………藤崎多佳代
  - 連載・第3回
    - 時間を考える・『時間がない』か……………小野 修
  - シリーズ・日本グループ紀行
    - 九州地方のエンカウンター・グループ  
～北部九州～……………高松 里 
    - 香川県のグループ・アプローチ……………瀬島 俊秋 
  - おしらせ・情報・あれこれ
-



# 目次

出会いの広場  
No. 10

ENCOUNTER



■特集・教育とエンカウンター・グループ	教師教育とエンカウンター・グループ	野島 一彦	1
養護教諭とエンカウンター・グループ	永原 伸彦	5	
看護教育におけるエンカウンター・グループの現状と問題点	鈴木 正子	8	
大学生とエンカウンター・グループ	斎藤 憲二	12	
大学生にとってのエンカウンター・グループ経験	下山 晴彦	19	
高校生のためのグループ合宿	山田 俊介	24	
■連載・第1回	関 丕	24	
ゲシュタルト・セラピーの訓練を受けにいった時の話	福井 康之	32	
■出会い百選(7)			
『金沢ヒューマニステック・関 丕さん』	島瀬 直子	38	
■メッセージ・私の声			
言葉の向こうの風景	水田 勲	45	
清里を思う	中坪千夏子	46	
私の今いる所	小泉 周二	49	
89・3宮浜	藤崎多佳代	50	
■連載・第3回			
時間を考える・『時間がない』か	小野 修	51	
■シリーズ・日本グループ紀行			
九州地方のエンカウンター・グループ	高松 里	54	
香川県のグループ・アプローチ	瀬島 俊秋	57	
■おしらせ・情報・あれこれ			

63



グループ体験学習には、ベーシック・エンカウンター・グループ、感受性訓練(センシティビティ・トレーニング)、Tグループ、ラボラトリー・トレーニング、IPR、行動集団カウンセリング等がある。わが国の教員の特徴の一つは「知育偏重」とよく言われるように、「アタマ」だけの教育(知的・概念的レベルの認知学習)に偏っているが、その大きな理由は、教師自身が主としてそのような形の教育しか受けていないために、「教えられた通りに教える」ことをくり返していくしかないためであろうと考えられる。

このような状況に対して、グループ体験学習は大きなインパクトを与えるであろう。というのは、グループ体験学習では、黙って座って「アタマ」だけを使って知識の伝達を受ければよいというわけにはいかず、「感情」を含む「ココロ」のレベルをinvolveさせる「体験学習」をすることになるからである。そして、教師自身がこのような学習を自ら体験すれば、同じように子どもに対してもそのような指導ができることになる。そうなれば知育偏重が解消され、まさに全人教育が可能になる。

本稿では、わが国で教師教育のためにグループ体験学習がこれまでに実際にどのような行われてきているのかを概観してみよう。

## 二、養成段階

養成段階(大学の教職課程)では次のような形で行われている。

### ① 人格成熟促進プログラム

愛媛大学教育学部の福井康之は、「(教師としての)資質の形成の重点は、教師として選ばれた使命や責任を意識的に強調した特殊な人格形成を目標とするのではなく、人間として普遍化された価値観に基づく成長の促進の保障を意図すべきである。即ち、人格成熟の

促進である」と考え、半期の授業の中で、感受性訓練で使用されているラボラトリー学習を中心にデザインされた体験学習のプログラムによる実習を行っている。

### ② 四段階学習法

東京家政大学の増田実は、エンカウンター・グループの原理に基づいて、四段階学習法(仮称)と名づけられた方法で、授業の中で学生相互の話し合いを重視し、学生自身が人間関係の原理と心のふれ合いを体験しながら、授業の中で教育のあり方を探究するよう援助している。第一段階:「読む」、第二段階:「書く」、第三段階:「読む」、第四段階:「話す」という具合に進められていく。

### ③ 行動集団カウンセリング

中澤次郎は、筑波大学の学生、Y国立大学経済学部二部の学生で教職を履修する学生、U大学の教職履修者を対象として、行動集団カウンセリング(その原理は集団のメンバーが深い相互関係と相互信頼を体験し出会いを体験することが目的、集団活動の目標をリーダーがメンバーに明示、行動理念の原理を集団カウンセリングの中で実践)を積極的に実施している。

## 三、研修段階

研修段階(現職教育)では次のような形で行われている。

### ① 教育相談ワークショップ

土田修緑らは、群馬県教育センターと市町村教育研究所が昭和四十年より実施してきたエンカウンター・グループ方式による教育相談宿泊研修(教育相談ワークショップ)にコミットし、その報告



を行っている。その目的は、「教育相談に関する諸技術の習得や意欲の喚起、相談員相互のチームワークの涵養、相談員自身の精神的健康の回復など」である。ちなみにそのワークショップは他の所へ波及し、岡山県の藤ヶ鳴ワークショップ、東京の幼稚園の先生を中心とした「わかめの会」の合同研修会、全国学校教育相談研究会合宿研修会が行われるようになっていく。

## ②学校カウンセラー養成定期研修

刈部良吉は、新潟県教育センターが実施している「学校カウンセラー養成定期研修」におけるグループ体験（ロール・プレイング、感受性訓練、Tグループ等を基盤にしたもの）について報告している。この研修は、究極的には学習者中心のあり方をめざしながら、研修の場においては、研修参加者と研修を担当する者との互いの経験を大切にし、ロジャースのいう「十分に機能する人間」を望ましいひとつの極として、実習を中心として行われている。

## ③福岡プロジェクト

野島一彦・村山正治は、福岡県教育センターでの教育相談担当教師のためのベーシック・エンカウンター・グループ（福岡プロジェクト）について報告している。EGの位置づけについては「従来のカウンセリング講座は、理論だけに片寄りがちである。しかし、カウンセリングで、何よりもまず重要なのはカウンセラーの態度であるというロジャースの説にもとづき、このプログラムでは、グループ経験の中で、自分自身を体験的に発見することを目的とし、そのためにEGが導入されている」と述べられている。

## ④学校カウンセラー養成のための宿泊研修会

佐賀県高等学校教育相談研究会は、学校カウンセラー養成のため

の宿泊研修会として、エンカウンター・グループ・ワークショップを実施し、その報告をしている。

## ⑤教師のためのエンカウンター・グループ経験と人間中心の教育研修会

畠瀬稔は、現職教員の対人能力（感情移入、自己一致、肯定的尊重など）の向上をはかること、人間中心の教育の思想および技法と態度を研修し、授業と学級経営に反映させること、を目的としてグループ体験とcognitive skillの両者を統合的に研修する「教師のためのエンカウンター・グループ経験と人間中心の教育研修会」というワークショップ（非官製研修）を開催している。

## ⑥エンカウンター・グループを導入した教師研修

手島茂樹は、エンカウンター・グループを体験した体験教師と体験していない一般教師の価値観がどのように違うのかに比較を行っている。その結果、例えば小学校勤務者の場合、体験教師は「教師の姿勢」「人間性」「自発性・可能性」を重視し、一般教師は「社会性」「人間性」「学芸的行事」を重視し、とりわけ「教師の姿勢」に対しては低い評価がなされている傾向がみられた。

## ⑦養護教諭のための教育相談研修会

永原伸彦は、人間関係研究所主催の「養護教諭のための教育相談研修会」について報告している。その意義や効用は、「悩みや内的体験を話すようになるまでの深まりを待つことの大切さを、体験的に学んだ」、「切実な悩みを話すことが、いかに恥ずかしく、緊張し、逡巡するものか、そしてどんなに勇気があることかを、体験的に教えてくれた」等であった。

## ⑧行動集団カウンセリング

中澤次郎は、学校カウンセラー訓練において知的学習（講義や演習による知識や技術の学習）よりは体験学習（実習や体験による意識変革の学習）の方が学校教師の意識の変化を生ぜしめるということを証明する研究を行っている。研究対象となった研修会は六日間で、一日目～五日目の午前には知的学習、五日目の午後～六日目の午後に体験学習（個人カウンセリング実習、行動集団カウンセリング実習）が行われた。結果は仮説を支持するものであった。

## ⑨ニュー・カウンセリング・ワークショップ

人間中心の教育を現実化する会とニュー・カウンセリング研究所は、ニュー・カウンセリング・ワークショップと呼ばれる体験学習の場を毎年全国各地で開催している。参加者は教師だけに限られてはいないが、多くの教師が参加している。

## ⑩教師のためのセミナー

南山短期大学人間関係研究センター（担当者：山口真人）は、「教師のためのセミナー『生き生きとした授業をつくる』——ヒューマニスティック・エデュケーションへの接近」を毎年開催している。このセミナーは現在教職に就いている人々が、学級の中でのひとりひとりの児童・生徒の真実の姿に迫る視点を探り、子ども達が生き生きとした感情や意欲を発達させることができるような授業をつくり出せるように、自己発見と自己成長のための相互啓発の場を提供することを目的としている。

## ⑪IPRトレーニング

IPR研究会は、相模原市立相模原教育研究所で、教師のためのIPRトレーニング（Inter-Personal Relationship Training）を実施

している。

⑫「教育」のためのエンカウンター・グループ・ワークショップ  
人間関係研究会（担当者：増田實ほか）は、「教育」のためのエンカウンター・グループ・ワークショップを実施している。このプログラムでは、「小グループ経験」、「関心別グループ」、「参加者全員のグループ経験」、「プレゼンテーションによる学習」などを通して、自己の内的成長と対人関係の豊かさを体験していくこと、それとともに授業、生活指導・カウンセリングなどへの探究を参加者相互のかかわりの中で進めていくこと、が特徴である。

## ⑬カウンセリングマインドを体験的に研修する会

島根PCA（Person Centered Approachの会、世話人：新免彰之）は、カウンセリングマインドを体験的に研修する会（二泊三日）を企画している。研修内容は「基本的には参加メンバーの主体的な働きを中心に展開されると思いますが、グループ経験、カウンセリング演習、ロールプレー、ニューカウンセリング、感受性訓練、傾聴演習、フォーカシング等々の中から研修内容が見つけれられるように考えています」となっている。

## ⑭ヘルスカウンセリング講座の「カウンセリングの実習」

文部省、財団法人学校保健会、各県の学校保健会、教育委員会の主催で、この数年全国をいくつかのブロックに分けて、養護教諭を対象としたヘルスカウンセリング講座が実施されているが、そのの中核プログラムとして「カウンセリング（エンカウンター・グループ）の実習」が組まれている。





## 一、なぜ養護教諭か

われわれが「養護教諭のためのEG」を企画するまでには次のような経緯と背景があった。

(一)、われわれの研究所での活動の大部分は、日々の心理相談活動にあてられているが、登校拒否を中心とする教育相談ケースの中で、養護教諭の存在の大きさをあらためて痛感させられていたのである。養護教諭が直接ケースを担当している場合もあれば、担任教諭や生徒指導担当教諭を影に日なたに応援している場合もある。あるいは、子どもの方から養護教諭だけにしかコンサルタントがつけられない場合もあって、訪問カウンセリングや保健室登校など、多種多様な形で養護教諭が活躍しているのであった。実際のケースを通して、われわれは教育相談における養護教諭の役割の重要性を再認識させられていた。

(二)、このような状況の中で、研究所が開くカウンセリングに関する講座などへの参加者に占める養護教諭の割合が、目立つほどに多くなっていた。養護教諭の人たちの熱意と意欲には、何か並々ならぬものを感じたのである。むしろそれは、養護教諭を取り巻く状況が彼女たちをかり立てていると言った方がよく、何か切迫したもののさえ感じさせるほどであった。

## 二、なぜエンカウンター・グループか

ではなぜ、いわゆる教育相談研究会やカウンセリング講習会ではなく、EG方式を導入したのかについて述べてみたい。

(一)、養護教諭が活躍しているということは、逆に言うとも様で深刻なケースを多く抱えているということでもある。筆者は幾人かの

養護教諭の方々からケースの相談を受けることになったが、多忙な上に困難なケースを抱えて、心理的負担を強く感じている養護教諭も少なくないことがわかってきた。しかも現状では、養護教諭はほとんどが単数配置なのでそういう面からもストレスにさらされやすくなることがある。養護教諭にとって、心ゆくまで語りあえる安全な心理的空間が必要であるように思えたのである。

(二)、甲斐（一九七七）も指摘しているように、EGがカウンセラーの訓練・教育にも大きな意義をもっていることは明らかである。養護教諭のカウンセラー的素養を高める上でも、EGは豊かな実りを与えるにちがいないと考えたのである。

(三)、われわれ研究所のスタッフが、EGのファシリテーター経験が割合豊かであったことも上げられるだろう。EGのもつ「いやし」の力や、グループ体験を通して得られる人間への深い信頼感こそ、今、養護教諭の人々に経験してほしいことだと考えたのである。

## 三、養護教諭のEG体験の意義

EG方式を導入したことにより、次のような意義があったように思われる。

(一)、EGではグループが深まるにつれて、その人が日常では話さないような深い内面的なことがらや、その人にとって重要な意味ある過去が語られようになることがしばしば起こる。このことは、苦しみや内的経験を語るようになるまでの深まりを待つことの大切さを体験を通して学んだことになる。また養護教諭は、自らの体験を通して、内面を語ることや、自分にとって切実なことを語ることが、いかに緊張し困難なことを学んでいく。これらの経験は、例えば、保健室にやってくる子どもたちが、体の不調を訴え、ベッドに横になりながらも、その背後にある不安や葛藤を話すことがいかに難し

いかということ、自からの経験を通して共感的に理解できるようになっていくことにつながっている。

(二)、保健室には、子どもからみて特有の「許容的やわらかさ」がある。濃厚な管理社会体制と化している現代の学校の中で、このやわらかさ、いい意味でのあいまいさは、精神衛生上も極めて貴重なものであらう。

このやわらかな空気を育くむものとして、養護教諭の在り方や関わり方が大きな鍵をにぎっているだろう。少なくとも保健室には、先生―生徒、看護者―患者という役割関係だけではない、もっと自由でやわらかな雰囲気が大切である。表面的な役割関係を越えたところでの出会いを志向するEG体験は、このやわらかな空気を育くむことのできる在り方に関して、養護教諭に示唆するところ大であらう。

(三)、EG体験の中でのファシリテーターの動きやリーダーシップのとり方からも、養護教諭として学ぶことが多いようだ。前述したことも関連があるが、養護教諭の何分の一かは、EG体験後、保健室を場ないし空間としてとらえる傾向が一層強くなったと述べている。その場の心理的安全性を高めるといふ発想を持つとき、ファシリテーターの動きが結果として大変参考になったというのである。例えば、ファシリテーターはあまりせっかちに押しやばらないで待っているし、場の緊張をほぐしたり安全性を高めるためには積極的に自分を皆に「見せる」ようにする。自分はどうなことを考えている人間で、今どんな風に感じたかなどを積極的に表現することによってメンバーからよく「見える」ように動く。このファシリテーターの開放性が場をやわらかくしていくことも多い。このような動きは、多感で敏感な子どもたちを相手にすることが多い養護教諭にとっても大変示唆に富んだものである。

(四)、養護教諭同士の間でも世代間の微妙なズレや、養成課程が幾

通りもあることによってのギクシャクしたものももちろん存在する。EG体験の中では、これらのことがおざなりに扱われることなく、真剣で生き生きとした関係が創造される中で、一人一人が対等の人間として出会い、実感されていくことが多い。深い次元でのお互いの触れあいは、お互い同士がかけがえのないものであることを実感させ、微妙にあったギャップやギクシャクしたものを取り去っていくことが多い。

以上養護教諭のEG体験の意義について述べてきたが、もっともっと多くの意義がそこには内蔵されているにちがいない。できれば今後、養護教諭自身によってこのEG体験の意義について発表されることを、筆者としては望みたい。

一方EG導入については何もかもうまく行ったわけではないことも事実である。時には深まりのないグループ体験に終わったこともある。また必ずしも肯定的な体験をしなかった人たちもいる。これらのことも視野に入れながら、EG導入については更に様々な角度から検討されなければならないだろう。

#### 参考文献

- (一)、甲斐隆 一九七七 カウンセラー訓練におけるエンカウンター・グループ、佐治・水島編「心理療法の基礎知識」有斐閣
- (二)、永原伸彦 一九八四 地域活動から学校保健へ「学校保健研究」二十六巻七号



ながはらのぶひこ  
●英盛県商工経済会  
人間関係研究所

# ●看護教育におけるエンカウンター・グループ の現状と問題点

鈴木 正子

## 一、看護教育におけるエンカウンター・グループ (以下E・Gと略)の位置づけ

わが国における看護教育のカリキュラムの概念枠組みは、米国の看護教育者たちで結成する団体NLN (National League of Nursing Education) の影響から、現在では「人間」、「社会」、「健康」、「看護」の四つの概念で考えられている。この概念からおろした下位概念に対して各科目構成がなされている。

一般的などころで言えば、看護教育課程はいわゆる自然科学、社会科学、人文科学といった一般教養科目のほか、医学、薬学、生理学、病理学、公衆衛生学、保健学、栄養学など人間の健康にかかわる専門基礎科目と、専門科目としての看護学に分かれる。その中で人間の概念に当たるところには哲学、心理学、教育学などのほか、臨床心理学、人間発達学、情報科学などが取り入れられている。集中的グループ経験および対人関係技法に類することを一応E・Gに代表させることとするが、学生は臨床心理学辺りでこれらを学ぶことになる。

しかし、私の考えるところ、E・Gの元になっている考え方は決して狭いものではなく、もっと広く看護学全般にかかわる基礎的な部分を占めるものとして位置づけてよいものではないかと考える。

実際、E・Gと称さなくとも看護学を専攻するものの多くは、なんらかの形で人間関係の技法ないしは考え方の問題として、この領域にはかなり関心を抱いている。私自身はE・Gに流れる一種の思想ないしは人間観、技法に関して、看護の成立する基盤としての患者―看護婦関係形成にかかわる重要な中心概念に位置づけている。患者―看護婦関係は単に看護の起点としての関係にとどまらず、看護のプロセスの全てであり、看護活動の創造の一切の源になるところである。そして、看護婦に求められる態度は、まさに人間を尊重し、安心と自由の風土に裏付けられるE・Gに流れるものと同じと言える。それほどまでに深く看護と密接である。しかし、看護教育の現状においては、日々進歩する膨大な医学知識を習得するための時間が非常にウェイトを占める。自然科学的なモデルで成り立つ医学と、人間科学的な思考を要求する看護学との間で多くの混乱を抱え込んだまま、人間的に、あまりにも人間的であるE・Gが正しく位置づけられているとは言えず、看護の世界で必ずしも理解が十分



でないのが現状であろう。

## 二、看護教育とE・G的なものの接点

看護教育課程が他の領域の教育と著しく異なるのは、実際の患者に接する臨床看護実習が国で義務づけられ、大きな時間を占めることである。まだ生活経験も浅く、自己の確立もままならない中に、病院を主とする実習に出かける学生にとって、多くの難しさがある。看護婦自身が「自由に自己発揮できる自分である」ということは、看護婦としての大きな要件である。

### (一) 臨床実習の場での看護学生<sup>1)</sup>

臨床実習で学生が感じる難しさは大きく分けて二つある。一つは看護の知識、技術であり、もうひとつは人間関係を形成する難しさである。

知識、技術と言うことでは、いわゆる内科系、外科系その他それぞれに特徴はあるが、健康障害の部分について観察、判断し、問題を見いだし必要な看護を責任遂行していかなければならない。もっと端的に言って、目の前にいる人が呈している病状が見えなければならぬ。人の訴えが聞こえなければならぬ。次に述べる人間関係の問題は、この見るプロセスの中で既に始まっているのであるが、とにかく、いまある痛みが何に由来しているのか、この苦痛はどのように身体を動かすことによって楽になるのか、見るもの全てが過去の知識の集積との照合に始まる人の身体の観察と、患者―看護婦間で交わされる確認の往復、それに対するケアへの判断の連続なのである。激しく動く環境の中で、学生は自己発揮することがきわめて困難な、危機的状況におかれる。知識の活用どころか、目の前にいる、おおかたは年長の、日頃の生活経験の中では触れるこ

とすらなかった人と対話し、さらに援助関係を結んでいかなければならない。学生の行動力は、多くはこの患者との人間関係如何に左右される。

臨床での人間関係は患者ばかりではない。看護婦以外の多くの医療チームの従事者、患者家族、指導教員などがある。そうした環境の中で、青年期にあって、彼らはこの実習経験をおして医療、看護という世界に適応し、そこでの価値体系を取り入れ、看護婦としての自己を形成していくのである。短期間の間に単に学問的な知識、技術を身につけるにとどまらず、ある意味では非常に特殊な医療社会における文化を取り入れ、そこでの自己のありようを獲得し、同化していくプロセスでもある。あらゆる価値観、倫理観はもとより、白衣に象徴されるある種の美意識、身のこなしといったことまで含む「何か」を獲得するのである。実習後の学生の反応からは、指導者の方で学生が自己発揮できる環境づくりをしなければ、学生は看護行動が十分とれないばかりでなく、自己に否定的な感情を抱き、萎縮してしまうという結果を得ている<sup>2)</sup>。

### (二) 看護婦の病室での「居方」

患者の側にいる。苦痛を感じ取る。疾病の受容、死の受容を助ける。自立を助ける。

看護ケアの本質は患者の側にいて、患者の呈する苦痛を感じ取り、患者が援助して貰いたいと思う心の自由な表出を助け、そしてこちらの行なう援助がどれほど患者の要求に沿っているかを確かめつつ進むプロセスであると考えられる。それは言語的、非言語的にかかわらず患者に接近する相互関係性の中で行なわれる。たとえ患者が病気の性質により、周りの状況を判断する力が衰えた段階においても、それは同様である。患者という存在のありようは、しばしば人間にとってこの上なく不自由な状況に身をおき、普段は誰にも見せ

ることのない部分を他人の目にさらさなければならぬ存在のしかたである。自分の日常からかけ離れた環境に身をおき、しかも、食べることに眠ること、呼吸をすること、排泄に至るまでときには他人の手にゆだねなければならぬ。自分のことが自分でまかなわなければならない状況に身を置くことを余儀なくされる。したがって、看護婦は側にいることによって、患者が安心して心を開き、自分の言いたいことを言い、苦痛の軽減をなしていくための存在とならなければならぬ。看護婦自身が患者の要求を受け止め、患者が安心してそこに身を委ねることができる場とならなければならない。

苦痛から立ち直り、元の健康な生活に戻るまでの自立のプロセス、ときには一生治ることのない疾病や障害を受容し、病気と共存しつつその状態を維持するプロセス、また、医学的にもはや治癒する見込みのない、人生の末期にある人の安らかな死へのプロセス、どれもこれも重い課題に看護婦は向き合っていかなければならない。

看護婦が病室にいる“居方”は非常にE・G的である。それとなく自分を病室に居させる。患者が必要としていることを感じ取り、必要なように接近していく。自立を妨げないよう、多過ぎず少な過ぎずのケア。患者は看護婦の本心を感じ取ることに於いては、自身の痛みや苦痛を実感しているだけに、実に鋭い。たいていの患者は、看護婦の関心が本心から自分に向けられているかを、すぐに見抜いてしまう。

癌の患者の場合、病名を偽っていることが多い。

「わたしの病気は、もう手遅れでしょうか。」

看護婦はたじろぐ心をどうにか保って自分の心を抑えつつ、患者の前に立ちつくす。やがて、次第にその病室への足が重くなり、ときには「あの患者は、わたしを嫌っているのではないか」と言った防衛規制に逃げ込むことにもなる。看護婦にとって自己理解が必要なのはこの辺りでも言える。じつくりと患者の話に耳を傾け、患者

がこころゆくまで話が続けられる、そうした相手として病室にいることが、求められるのである。

そして、それがたとえ学習途上であっても、臨床の場はむき出しの現実である。さしたる人生観、死生観もなく看護学生は否応なくそれと向き合うことを要求される。教員は病室に向かう学生、そこから戻ってくる学生の表情を見、話を聴き、緊張をはぐし、学生自身の自己理解を助ける。それ自体、看護と同じケアの構造である。学生が、教員や看護婦に支配されることなく自立して、自己との相互関係の中で患者の心を理解し、ケアに成功したと思える度合が高いほど、教員のサポートは成功しているとも言える。現場で学生を迎える看護婦も教員と一緒に実習環境を整える、それ自体非常にE・G的なプロセスなのである<sup>(9)</sup>。

### 三、現場の看護婦のジレンマ

学生のと看は時間をかけて、理想的な看護を経験したとしても、ひとたび現場にはいると、たちまち多忙の渦の中に巻き込まれる。

次の言葉は、そうした看護婦の言葉である。

● 患者の話をゆっくり聴きたいが、時間がない。いつも、気になる患者に会うのは時間外である。

● 患者の話をゆっくり聴いていると業務が遅れ、同僚にいやがられる。

● 腰掛けて聴くと、同僚から暇そうにみられる。

● 自分は思い切った腰を据え話を聴くが、三交替なので申し送りをして、同僚は引き継いでくれない。

● 三交替のうえ、チームに分かれているので、今度いつ、その患者に会えるかわからない。

● 患者が話しかけてくるのはいつも夜勤のときで、一人か二人で勤

務しているので、とても話を聴くゆとりがない。

●とにかく疲れている。ものを考える暇がない。自分の方が聴いてほしい。

●自信が持てない。知識不足に悩む。

●患者の話を聴くといっても、どうしていいかわからない。

●E・Gに参加して気晴らしにはなるが、自分の態度として取り入れるまでには時間がかかりすぎる。

●自然科学的な考えと噛み合わない。

そして看護婦は自己自身との関係、婦長との関係、同僚との関係、医師との関係、患者との関係に絶えずストレスを感じている。仕事を辞めたいと思い、自信のなさを補う手段としては、膨大な医学情報を得ることで自らを補強しようとし、欠乏感に拍車をかけてしまう。医師の指示で仕事をする部分が大きく、これら諸条件の中で、主体的に患者に接する態度を養うまでには、相当意識の変革が必要とされる現状にあると言えよう。

#### 四、看護教育におけるE・Gの実践例

わが国で初めて、看護教育にE・Gを導入し自ら実践したのは見藤である。見藤の報告によると、一九七一年より主として日本看護協会の研修学校生を対象に始めたのが最初で、一九八三年までに見藤の行ったE・Gは、一般人も含めて公にされたものだけでも四六回に及ぶ。見藤は早くから学生を対象とする面接相談を手掛け、わが国で初めて看護教育講座を開き「我ーなんじ」関係を看護教育学におけるもっとも重要な中心概念に位置づけ、独自の看護教育を展開していることでも知られる。看護教育においてほんのちよつとした試みでもE・Gの効果があることは筆者も体験している。

看護学生を対象とするE・Gについては、野島の報告その他に

よっても知られる。人間関係研究会主催のプログラム「看護のためのエンカウンター・グループ」に最近筆者も参加の機会を得ているが、参加者がいまひとつ振るわないのは何故だろうかと考えている。対象が看護婦であるからといって、E・Gのファシリテーターについては、必ずしも看護婦自身が行う必要は全くないと筆者は考えている。専門家の力を借りればよいのである。

#### おわりに

いままで述べてきた通り、看護の場とE・G的なものとは非常に密接な関係にあることがわかる。否、むしろ看護の現場とはこのような関わり無しにはやっていけない、人間のさまざまな心理の渦巻くところなのである。むしろ、医学的なモデルによってのみ病人に起こる現象を理解しようとするところこそ、間違いであることに医療関係者は気づかなければならない。先にも述べた通り、現場の看護婦はそのことに気づきながらも、現実には忙しさに流されている。「燃えつき症候群」が看護婦を襲っている。物理的な時間の制約には、如何ともし難いものがある。しかしながら、看護教育の場を見ても、患者に接する看護婦の態度、人間性を養う教育がもう少し豊かになり、真に人間性を尊重できる看護、患者心理を十分に考えて対応できる看護婦の育成の実用化には、多くの隘路がある。看護の本質とそれを表現する方法をどう考えるか、看護婦の考え方による。ひとえに看護婦諸師の認識を待つところである。

#### 引用文献

- (1) 鈴木正子、一九八六 「学生が臨床実習で感じる“難しさ”について」、ナースステーション、十六巻一号 医学書院
- (2) 鈴木正子他、一九八六 「内科看護を“難しい”と感じた学生の実習中に

おける患者・看護婦・教員との関係」、ナースステーション、十六巻一号  
医学書院

(3) 鈴木正子、一九八七 「看護におけるコミュニケーションの原初的構造」、  
ナースステーション、十七巻二号 医学書院

(4) 鈴木正子、「一般科における心の看護の実践——死への告知」、精神科医療  
ガイド、昭和六三年版

(5) 見藤隆子、一九八六 「看護教育へのエンカウンター・グループの導入」  
看護教育、二十七巻四号 医学書院

(6) 見藤隆子、一九八七 「人を育てる看護教育」、医学書院

(7) 見藤隆子、一九八三 「実存的自己についての学習」、千葉大看紀要、五

(8) 鈴木正子、一九八五 「エンカウンター・グループ法の応用による自己表  
現をめざした授業の試み」、埼玉県立衛生短大紀要、十号

(9) 野島一彦、一九八〇 「看護学生のエンカウンター・グループに関する研  
究」、福岡大学人文論叢、十二巻三号

(10) 野島一彦、一九八三 「あゝLow Development Groupの事例研究」、福岡  
大学人文論叢、十四巻四号

(11) 野島一彦、一九八四 「エンカウンター・キャンプの試み」、福岡大学人  
文論叢、十六巻三号

(12) 野島一彦、一九八四 「あるMiddle Development Groupの事例研究」、福  
岡大学人文論叢、十六巻三号

すずき まさこ  
●埼玉県立衛生短期大学

## ●大学生とエンカウンター・グループ

斎藤 憲 司・下山 晴彦

### 一、はじめに

我々は、日々、学生相談所において、学生にたいする相談活動に  
従事している。

活動の中心は、個人相談（ガイダンス・カウンセリング・心理治  
療）であるが、エンカウンター・グループ合宿をはじめとして様々

な自己啓発プログラムも主催している。これは、一つには、この年  
代の青年たちにとって、他者との「出会い」を通じて、自らにも  
「出会う」ことが、何よりも心理的な発達・成長を促すと考えてい  
るからでもある。本稿では、本年度に学生たちと過ごした二つの経  
験をもとに、現在の大学生が置かれている状況を概観しつつ、様々  
なエンカウンター（出会い）が、大学生にとってどのような意義を  
持ちうるかを記してみたい。





グループ・プロセスとも当然関連しているが、セッションにおいて自分の居場所・居方を見つけ難い学生が、インタレスト・グループ（セッションとは別に、各メンバーが自由に好きなように過ごせる時間枠）でのゲーム（フルーツバスケットやハンカチ落とし）、海水浴、山歩き、といった活動や、日常生活場面、例えば、お風呂や食事といった自然な場での交流で、“その人らしさ”を自由に発揮していることも印象的であった。一部の学生にとっては、話し合いのセッションよりもむしろこういった活動・時間の中にこそ合宿参加の意味があったのではないかと思わせるほどであった。

#### ● ボランティア活動の経験から

筆者（斎藤）は毎夏、東北地方の山中で開催される慢性疾患児（小児糖尿病児）療育キャンプに、ボランティア・スタッフのリーダーとして参加している。このキャンプは現在七泊八日で計三回行なわれ、各回ごとに小一から高三までの疾患児約五〇名が参加している。本キャンプでは、医療面での目的に加えて、子供たちとスタッフが寝食を共にするなかから、子供たちが疾患を受容し、自らの人生を自律的に切り開いていくことができるよう心理面での援助をしていくことを一方の大きな目標にしている。（疾患児に対する本キャンプの意義については、斎藤他（一九八五）、保坂・斎藤（一九八七）を参照されたい。）

また、見逃せないのは、本キャンプが、スタッフとして参加・協力してくれる学生たちにとっても心理的な成長の場になっていることである。これはとりもなおさず、子供たちや他のスタッフの人の人たちとの「出会い」から生じていると考えられ、たとえて言えば、キャンプ自体が拡張されたEGに近い性質を有している。（また、プログラムの一環として中学生・高校生とスタッフとで毎晩EG的なセッションを設けている。）

参加してくれた学生たちと共に過ごして気づいた点を挙げてみよう。

#### ① 参加学生の偏り

例年スタッフ募集の呼び掛けを各大学に対し幅広く行なっているが、男子学生が必要数集まらず苦勞する一方で、女子学生は説明会場があふれるほどに集まる。男女とも教育・福祉・心理関係を専攻する学生が大部分を占め、年を経るごとに同質的な学生が集まる傾向にあるように思われる。

#### ② 「役割」がないと動けないこと

スタッフとして集まってくれた学生たちはおしなべて真面目であり、“スタッフとして何をしたらいいか”が明確な場合には、一生懸命に仕事をし、また、子供たちの世話をしてくれる。

一方、このキャンプでは子供たちにもスタッフにも最大限自主性を発揮してもらうことを志向している。しかし、自由時間や話し合いの時間等の自主的な判断・動きが求められるところでは、学生たちは途端に引っ込んでしまい途方に暮れてしまうようである。また、適度にはめを外すことも苦手であるように思える。

#### ③ 「出会い」への直面、または回避

キャンプが日を重ねるにつれ、子供たちから徐々に本質的な問いが投げかけられてくる。“何故このキャンプに来たの？”（“健常者の立場から”）私たちはどう見えるの？”等、スタッフとしての「役割」に安住しては答えることのできない問いである。子供たち特に中・高校生は“（疾患をもった子供という）「世話をされる対象」としてではなく、「一人の人間として」つき合ってほしいのだ”というメッセージをぶつけてくる。

子供たちの訴えには、スタッフの存在そのものを揺さ振るインパクトがある。ここをぐり抜けて子供たちと向かい合えた時、大きな心理的成長が生じるようである。しかし、これを真正面から受け



## (2) 大学コミュニティと青年期の発達課題

ところが、大学にひとたび入学すると、講義の選択、アルバイト探し、さらには下宿生活に至るまで、“自身の裁量で判断・行動する姿勢”が求められる。さらには、ゼミや卒論ともなれば、勉強・研究するテーマ自体を自分で探さなければならない。

すなわち、大学においては、“能動性”“探索的姿勢”“自律性”“主体的であること”等を求める「儀式化」がなされていることになる。

また、この「儀式化」は、青年期の発達課題ともそのまま相応している。いわゆる青年期は、“アイデンティティ探索の時期”、即ち“自分らしさを求めて主体的に摸索しているモラトリアムの時期”であり、そのための様々な試行錯誤が許されている時でもある。“大学”という場、「学生時代」という時は、まさに制度的にモラトリアムを保証しているのだとも言える。

## (3) 学生たちの生活スタイルと「エンカウンター」く大まかな類型化の試みから

このように青年たちは、高校を卒業し大学に入るに際して、それまで二〇年近くも経験してきた「儀式化」とはかなり異なった（むしろ正反対の）「儀式化」に否応なしにさらされることになる。

さて、この急激な「儀式化」の変換に直面した時に、学生たちはどのように対処するのだろうか。特徴的なものを大まかに描写してみよう。

① 「固執型」く慣れ親しんだ高校時代までの生活スタイルに固執する。すなわち、講義、アルバイト、サークル・部活動等で予定を埋めつくし、その予定をこなしていくために思いのほか忙しい生活を送っている。

② 「慢然型」く過去のスタイルを手放したものの、新たな生活

スタイルを作りえず、慢然と毎日を過ごしている。なんとなく講義にも出ず、サークルにも入らずに目的を見出せないまま生活を送る。

③ 「表面的適応型」く自由な時間、身分を生かして例えば現在花ざかりのテニスやスキーといった“明るさ”志向のサークル活動に従事し、表面的には適応しているように見える。しかし、本質的な青年期の課題には取り組まないままに過ごしている。

④ 「自律型」く自身の興味・関心事項を求めて主体的に行動・思索し、学生時代を有効にモラトリアムとして活用している。等があげられようか。

「大学」というコミュニティは（高校までの学校システムに比べれば）非構造的な場であり、少々荒っぽい言い方をしまえば“構成員の自主性が尊重され、各自が自分らしい居方で居ることができ、自らすすみ出ていくことで何かを得ることができる場”であるという点で、EGと共通する特性を持った場であるともいえる。

しかしながら、実際には①く③の生活スタイルをもつ学生が大部分を占めている。そのため、このような場を、そして時間を、学生たちは充分に使いこなせていないのが現状ではないだろうか。「大学時代」は、就職して社会人となるまでのひとときの「休息期」としての意味しか持ちえなくなっているようにも思える。ここに、現代の教育システム全体の問題が顕現しているようにも思われるのである。

## ●再び今年度の経験から

前節で述べたことを参考にしつつ、今年度のEG、キャンプの経験をふりかえってみよう。

(1) ①く③の学生にとってEGなるものがアピールしないのも無理はなからう。彼らはEG的なあり方に目をそむけるか、そも





とする姿勢は、学生一人一人のあり方を最大限尊重するためにも必要なことであり、「エンカウンター」の理念とも決して矛盾しないはずである。

### ③ プログラムに工夫をこらすこと

単にアピールするためだけではなく、より積極的に学生の発達を促進するために、彼らの心理的なテーマに合わせて、プログラムにバラエティを持たせることも考えられる。たとえば、現在の学生たちが得る機会の少なかつた様々な生活体験（山歩き、バーベキューパーティといった野外生活等）を組み入れたり、構成的なグループやテーマを設けた話し合いセッションも組み込んでいくという方向性も一案であろう。

### ④ ベーシックなEGのあり方を守る

これまで述べたことと矛盾するようであるが、あまりEG合宿のあり方を変えて対象者を増やしていくことは求めなくともよい、という方向性もありうる。今、自分がEGに参加することに意味がある」と自覚的に感じられる学生に対して、EGは用意されていればいいのだ、という考え方もありうるからである。

### ⑤ 「出会い」を促す様々な場を準備していくこと

ある意味では、EGは日常生活における対人関係のエッセンスを、特別な枠組の中で集中的に体験しようとするものであるともいえる。EG合宿がベーシックな形を基本的に保つとすれば、また別の枠組のなかで異なったプロセスのうちに「出会い」がなされるようなプログラムを用意していくことも考えなければならない。例えば、ウィークリー・グループや日常開放型のオープン・グループ、様々なセミナーの開催、等はその一つの試みでもある。

以上、EGの今後に向けての幾つかの示唆を行ってみた。EGが生まれ、発展し、そして現在一つの転機を迎えつつあるように思われることも、我々の住むこの社会、時代の状況ゆえのことである。

我々は、何よりもまず、我々の日常の生活を、学生たちの生きる環境を、自然な「出会い」に満ちたものに変容させていく努力をしなければならぬのだと思われるのである。

### 引用・参考文献

- 保坂 亨・岡村達也 一九八六 キャンパス・エンカウンター・グループの発達の・治療的意義の検討 心理臨床学研究 4-1、15-26  
保坂 亨・斎藤憲司 一九八七 サマーキャンプにおける集団指導 小児看護 10-5、608-611  
近藤邦夫・沢崎俊之・斎藤憲司・高田 治 一九八八 教師-児童関係と児童の適応 ―教師の儀式化の観点から― 東京大学教育学部紀要 28、103-142  
斎藤憲司・高田 治・保坂 亨 一九八五 慢性疾患児医療キャンプにおける集中的グループ経験 日本人間性心理学会第4回大会 30-31  
下山晴彦 一九八七 グループ合宿・エンカウンター・集団心理療法 ―いのちを生かす「かたち」を探して― 東京大学学生相談所紀要 5、59-66

さいとうけんじ・しもやまはるひこ  
●東京大学学生相談所



—EGにひかれていった私の経験から—

一、はじめに

二、EGのどんな点に魅力を感じたのか？

私が初めてEGに参加したのは大学二年の夏である。二回目は四

それでは、私はEGのどのような点に魅力を感じて、夢中になっていったのであろうか。これを整理してみることは、大学生がEGに求めていること、EGから得ていることの一端を明らかにすることにつながると思われる。そこで、ここでは、EG経験による変化など他の面については措くとして、EGに感じた魅力について考えてみたい。大学四年の頃、私が感じていたEGの魅力を思い起こしてみると、次の三つの面が浮かんでくる。一つは、「自分が問われる場、自分を試す場」としてのEG、二つめは、「人との出会い、つな

がりを経験できる場」としてのEG、三つめは、「EGで出会った仲間」の存在」である。以下、それぞれについて述べてみる。

### 三、自分が問われる場、自分を試す場

EGに参加することによって、必ずしも自分が意図していないでも、グループの中で自分の様々な面が問われてくることがあった。

また、自分のある面を自ら問おうとしたり、自分にとつての課題である行動を試してみようとしてEGに臨むこともあった。私が問われ、取り組んだ主な面には、次のようなものがある。

#### ●自発性

私は、初めて参加したEGでは、とてもかたくなっていて、自分から発言することはほとんどなく、グループがどうなっていくのだろうかとずっと戸惑っているという状態であった。グループを終えた後は、満足感は低く、EGに対して否定的な思いがわいてきたりもした。しかし、日が経つにつれ、満足感が低かった原因は、自分の参加態度にあったのではないかという考えも起こってきた。そして、それをはっきりさせたいと思い、もう一度参加することにした。二回目のEGでは、少しでも自分から動いてみるように努めた。すると、グループの展開に自分が関わっているという感じが大きくなり、満足感も高くなった。その経験から、「EGでは、自分がどのような過ごし方（参加の仕方）をするかが、参加後の満足感を大きく左右する」と考えるようになった。そして、それからは、EGでは、その時、その時を自分が納得できる過ごし方をしようという心がけ始めた。このように、EGに参加して、私が最初に問われたのは、自発性というテーマであった。

その後、EGに数回参加する中で、EGでは参加者一人一人の自発的な動きが尊重され、その積み重ねによってグループが展開して

いくということに気づいた。EGのこの特徴は、展開（プログラム）が決められていてそれに沿って進んでいく多くの授業や研修とは異なり、プロセスそのものを一人一人が大切にでき、私には大きな魅力として感じられた。また、この特徴により、その時その時の自分に応じた参加の仕方が可能であり、得られるものもそのつど異なってくるように思われた。

#### ●自分の内的な動きの尊重

自発的な動きが尊重される場であることに気づき、自分が納得できる過ごし方をしようとし始めれば、おのずと、「自分は、今、何を欲し、どうしたいのか」という問いを向けることになった。また、ファシリテーターの働きかけによって、「自分の中に今どのような思いが起こっているのか」ということに目を向ける場合もあった。ファシリテーター自身もその時その時の自分の思いを大切にしているように感じられた。こうしたことから、EGでは、自分の中で起こっていることに目を向け、感じ取り、それをできるだけ尊重するように動かしたいと思うようになった。社会的役割や場を盛り上げるというようなことを気にせずに、ありのままの自分であろうとすることが許されるということは、私にとって、心地よく、魅力的なことであった。また、ありのままの自分であろうとすることで、自分について気づくことも多いのではないかと考えていた。

#### ●率直な自己表明

自分の内的な動きを尊重しようすると、自分が他の参加者に伝えたいと感じることを、できるだけありのままに伝えてみるという試みを迫られてくる。私は、それまで、集団の中で自分の考えを話すということができず苦手であったので、それは私にとって大きな課題となった。率直に語ることで、自分が傷ついたり、相手を傷つけたりするのではないかという恐れがあった。一方で、表明してみたいという欲求もあったし、表明することで、新たな気づきが生まれ





こともあった。このような中にその一員として存在することは、心地よく、気持ちいが安らぎ、他の参加者との間に暖かいつながりが生まれていることの喜びや、人間への信頼感の高まりなどが感じられた。これも、私にとって、EGの大きな魅力であった。また、そのような暖かいつながりが、日常生活の中にも、多く生まれることを願っていたし、EGは、そのためのよいモデルになるとも思っていた。

## 五、EGで出会った仲間の存在

EGで出会った人達と大学で会ったり、別のEGの機会に再会するというのがしばしばあった。そのうち何人かの人とは、会えばお互いの近況を語り合うなどして、身近な存在になっていった。そして、私にとって、次のような意味合いを持つ人達も現れてきた。

### ● 自己探究に取り組む仲間

EGの参加者の中には、私も含め、真剣に自己探究に取り組んでいる人も多くみられた。私にとって、自分にふさわしい生き方、価値観、人への関わり方などを真剣に問い、試行錯誤を続けていくということは、基本的にはやりがいがあり、喜びも多いことであった。しかし、時には、自信を失ったり、あせりや疲れを感じることもあった。EGを通じて、大学の中に、自分と同じように、真剣に自己探究を続けている人が存在していることを知ることは、それだけで、心強く、励みになった。個人的な交流が生まれれば、それはなおさらであった。自己探究に取り組む仲間といった意識を持っていた。

### ● 親密で、深い関わり合い

先のような人達の中の数人とは、個人的なつきあいがとても深まっていき、極めて親密な関係になっていった。お互いに自分の経

験や思いを率直に語り合い、理解し合おうとしていた。このような関係は、私にとって、大きな支えになってくれた。また、関わり合いの中で、私の人への関わり方の特徴や課題、他の人と自分の共通性と相違点など様々なことを考えさせられた。さらに、EGで経験したことを、日常生活につなげ、根づかせていこうとする取り組みにもなっていたように思われる。

### ● 年長のモデル

EGでファシリテーターであった人達とも、その後の関わりが生まれることが多かった。私が心理学を専攻していたということもあってか、そのような人達の多くには、強い魅力を感じ、引かれていた。それぞれが、純粹で、個性的であり、他の人には暖かく、とても尊重しているように感じられた。その人達の言動が、私の指針となったことも多かったし、知らず知らずのうちに言動をまねている（取り入れている）ということもあった。私にとって、モデルのような存在になっていたように、大きな影響を受けたと思う。

このように、EGで出会った仲間の人達は、貴重で、意味深い存在であった。

## 六、大学生であることとEG経験

これまで、大学四年の頃、私が感じていたEGの魅力を整理してきた。私が上のような魅力を感じたのは、一方では、EGという場の性質によるが、もう一方では、私自身の内的状況による。私が大学生生活の中で求め、取り組もうとしていたことが、EG経験の中に感じ取れたゆえに、EGに引かれていった訳である。そして、私が取り組もうとしていたことは、これまでの記述の中にもうかがわれるが、アイデンティティの探究ということである。

アイデンティティを探究することは、私に限らず、青年後期にあ

私もアイデンティティを求め、自分にふさわしい生き方、価値観、役割などを摸索していた。その私には、EGの中で、自分が問われ、自分を試すこと、人との出会い・つながりを経験することなどはアイデンティティを探究することと深く結び付いているように感じられた。もちろん、アイデンティティの探究は、EGという場だけで行なわれるものではなく、生活全体を通して取り組まれるものであった。それにしても、EG経験は、アイデンティティの探究をより深め、より豊かにしてくれたように思う。

ところで近年、大学生の自己探究への志向が弱くなっていることが、しばしば指摘される。たとえば、返田（19983）は、「困難にいどみながら、自己を確立し、確かな何かをつかみたいという生き方がありそれが大学生の生き方であるとみられてきました。いまの学生の中にはタタマエとしてすら、こういう生き方をしようというものが多くなっています。社会や他者に関心をもち、能動的に働きかけ、その中で自立的な自我を確立しようとする意欲が弱まり、狭い自己の中に閉じこもる傾向があるのです」と述べている。また、確かにそのような大学生は存在している（山田、1987）。しかし、多くの大学生がそのような状況にあると仮定したとしても、真剣に自己探究しようとしている大学生も存在するに違いない。そ

23

# ● 高校生のためのグループ合宿

## はじめに

私が高校生のエンカウンター・グループ（以後EGと略称する）にはじめて取り組んだのは一九七一年だった。その後八年間、通算一五回、二泊三日のEGを行った。一人の教師との「話し合い」だけでは、集団の中に入っていけない生徒もこのEGに参加すること、「仲間」がいることに気づき、集団の中に「自分の場」をつくることができるように思えた。同じ高校の中で「仲間づくり」ができるということが、EGの一番大きなメリットだったように思えた。

ところで、高校生のEGについて書くようにと依頼されて、ためらったのは、現在の私が行っているのは、教育センター主催の不登校生徒のための合宿であって、EGと呼べるかどうか分らなかったからである。以前、人間関係研究会主催で行っていた「高校生と大人のEG」についての記録や追跡調査などを基にして書くのならば、それなりのものになるかもしれないが、現在の私にとってはあまりにも遠い昔の事柄となってしまって、全然、書く気になれない。それで、一昨年度から始めた石川県教育センター主催のグループ合宿について書いてみようと思う。

## 一、合宿に至るまでの準備

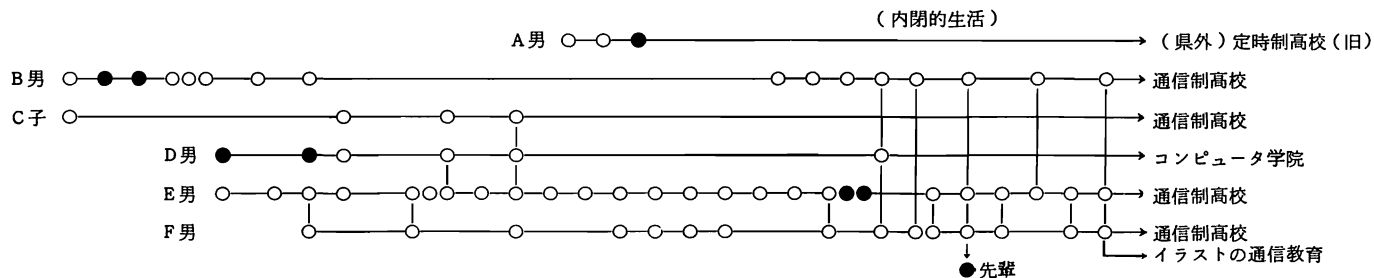
教育センターが企画する合宿は、現在、高校へ通学していない生徒を対象としている。具体的に言えば、学校へ行かないからエンターへ紹介された生徒たちのための合宿である。この生徒たちは一か月に二回か三回、当センターを訪れ、担当のスタッフと話したり、作業をしたり、ゲームをしたりして、自分の内面にエネルギーをためていく、いわゆる個別面談の過程で「友だちが欲しい」という強い願望を持つ。しかし、そういう気持ちになった時には、すでに学校というつき合いの場から離れ過ぎていて、自分から訪ねていく相手がいないのである。この悲しい叫びに、当センターのスタッフは、何とか応えたいと思った。スタッフは、その生徒たちを一つの場に集めたいと考えた。しかし、「会いたい気持ち」と「会うのがこわい気持ち」がそれぞれの生徒の中で共存しているの、スタッフが準備した「場」へはなかなか集まってこなかった。次の表を見ていただくと分っていただけだと思うが、最初の合宿実施までに約三年かかっている。

関  
不

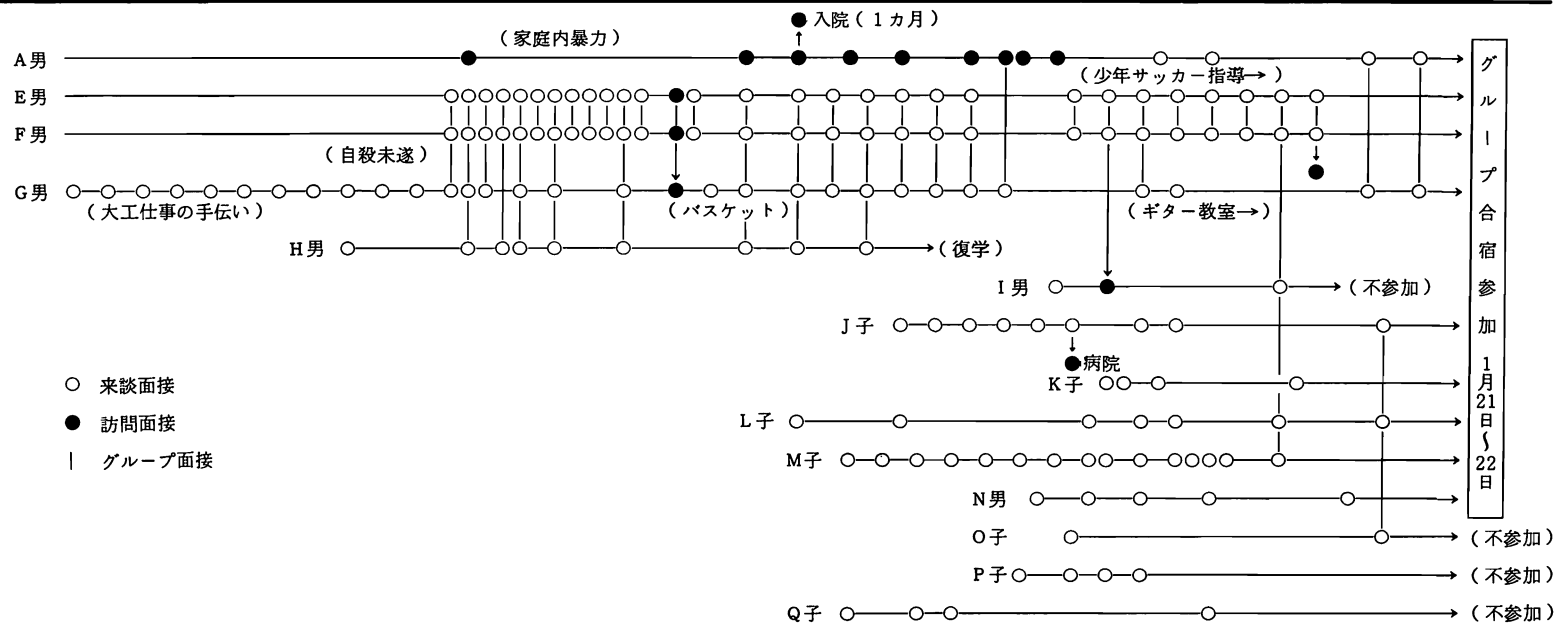
## グループ合宿実現までの過程

25

(60年) 4月    5月    6月    7月    9月    10月    11月    (61年) 2月    3月    4月



5月 6月 7月 8月 | 9月 10月 11月 12月 (62年) 3月 5月 6月 7月 8月 9月 10月 | 11月 12月 (63年) 1月



- 来談面接
- 訪問面接
- | グループ面接



## 二、第一回目の合宿の企画

相談課のスタッフは、厳密に言えば、特殊教育担当が二名、幼児教育担当が一名、生徒指導担当が一名、課長が一名であるが、教育相談には五名全員であたっている。この合宿には、このうちの三名が参加することとして、企画と準備をすすめた。私たちがお互いに確認し合った事柄をあげてみる。

1. 合宿の目標は「共に在ること」とする。
2. 合宿の目標と意味を、保護者に理解してもらえるように、十分に説明し、「合宿参加承諾書」を参加費（一、〇〇〇円）と共に提出してもらう。
3. スタッフは、参加をよびかけた生徒とのかかわりを何よりも大切にする。特に、参加への不安を共有することに努める。
4. スタッフ以外の協力参加者は、精神科医（嘱託）と文教会館の教育相談員および当センターに内地留学をしている二名の教師とする。
5. 会場は、県関係の研修所で温泉があり、使用上の制約が少なく、卓球室や麻雀室や大きな和室がある施設とする。
6. 一泊二日のプログラム内容は、生徒たちとスタッフの希望で、その都度きめていく。ただし、何もきまっていなくて不安に思う生徒がいるので、スタッフがやりたいと思っていることを、あらかじめ「話」として伝えておく。
7. 集合場所と解散場所は、宿泊会場を原則とするが、保護者の依頼があれば、交通の便があるところまでの送迎をスタッフとする。
8. 健康保険証の写しをはじめとして、自分が必要な薬や洗面用具、衣がえなど所持品を明確に伝える。と同時に、マンガやギ

ターなど、自分が楽しめる物を持参してもよいことを伝える。

9. 間食用の果実、菓子、飲み物などは、スタッフが買いそろえる。
10. スタッフの役割分担（保健、会計、部屋割り記録など）を明確にする。

## 三、スタッフの努力目標

この合宿に参加するまでに、すごいエネルギーをたくわえることに努力した生徒たちの期待に応えるために、スタッフは自分たちの努力目標について話し合った。そして、次の三つの事を確認した。

1. 目標が「共に在ること」なので、生徒たちに、自分の気持ちを言語化することを強要しない。

2. 参加者全員が「ひとりになる自由」と「他の人と共にいる自由」を体験するためには、生徒に無理をさせないようにする。またスタッフは生徒の出すサインを見落さないようにする。
3. 「すべてに意味がある」のだから、ある一定の方向づけや深まりを高く評価するような姿勢ではなく、「一泊二日共に居られることで十分だ」という気持ちで参加する。

## 四、プロセス（一泊二日）

あらかじめきめてあるのは食事時間だけで、あとは参加者全員が話し合って何をするかを決める。

事例 第一回目の合宿

1月21日

10:00 ~ 11:00	会場内の散歩とSD法実施
11:00 ~ 12:00	自由時間
12:00 ~ 13:00	昼食





見てて、スーッと出て行ったからね。

R先生 N男が白紙の絵を見せた時に、P先生が「スゴイ！」とか「オーストラリアはいいなあ」と言ったから、N男はすごく嬉しくなった。だからP先生と一緒に麻雀がしたくてあの部屋まで来たけど、それが言い出さなくて、ちょっと寂しかったでしょうね。(中略)それからM子に聞いただけで、担当の先生がM子の技量を買って美術大学へ行かせようとしたら「私はそういう所へは行きません」と言って、それからビタッと学校へ行かなくなったのです。でも、今朝、教育センターに着いた時はニコニコの顔をしていたね。

Q先生 あ、そうだった。朝、私が出迎えた時は、割合、言葉がスーッと出る感じだったものね。

S先生 センターからここへ来る車の中では、三回くらい、こちらから話しかけたら、にっこり笑ったり、うなずいたりしていた。

T先生 M子が一番動きを見せたのは、セッションが終った時の休憩時間で、みんながM子の絵を見に集まってきた時じゃなかったかな。

P先生 麻雀も結構楽しんでたよ。

U先生 M子はほとんど言葉を発しないからああいう重々しい感じになるのかなあ。午後のセッションで、他のみんなとは離れてしまっていた。

R先生 ならみつけていたものね。

P先生 順番に自己について語る場面で、M子の番になったらどうなるかって、心配だったよね。

S先生 私も冷や冷やした。

T先生 手をギュッと握りしめて、すごく我慢してたみたい。

U先生 もう少し、M子には小グループで自己を語らせてあげればよかったのかなあ。それから大きなグループへ入っていった方が

よかったのかなあ。

R先生 でもね、さっき「頭が痛い」というのでお薬を持って部屋に行って、肩をもんであげた時、「先生は上手やねえ」って柔らかな方言で言ったのよ。今までは、いつもきれいな言葉で、感情のこもらない話し方だっただけに、何か違ってきてるような気がする。

T先生 私もパンを持ってM子の部屋に行ったら、寝たものだから「ごめんね。寝てたのに」と言ったら、スーッと起きてきてすごくいい顔をしていた。「ちょっとすっきりした？」ときいたら、「うん、すっきりした」と答えてくれた。きつと嫌な顔をして、そのまま布団にもぐると思ったけど。

U先生 M子にはスキップが必要なんだね。

R先生 家庭の中で言葉のコミュニケーションをしていないなと思っていただけど、身体的なコミュニケーションもしてないのかもね。抱いてもらったりとかね。T先生がM子にパンを持って行くというの、それに似たものでしょう。「自分を心配してくれる」というのが嬉しかったんじゃないかな。

S先生 そうだね。

Q先生 M子が出て行ったすぐ後、追っかけて行ったら「また特別扱いされる」というふうに受けとられたかもしれないけど、T先生が部屋に入った、そのタイミングがよかったんじゃないかな。

\*2 二日目のスタッフ・ミーティング(テープ録音)から

T先生 A男は食事はたくさん食べるのですか。目を覚ましている間中、食べていた。しかも、かなりのボリュームをね。そして自動販売機でジュースを買って、しょっちゅう飲んでたしね。他人と居る時の緊張感からそうなるのでしょうか。

R先生 A男は随分長い間、自宅に閉じこもっていたからね。

Q先生 E男もF男もお番茶をよく飲むね。ポット一本、すぐ空になってしまう。

P先生 葉を飲んでるから、のどが渴くんだね。それにしても、あのギター演奏はよかったね。

U先生 私、本当に感動してしまった。

T先生 目頭が熱くなって。

S先生　私も涙がポロポロ出て仕方がなかった。あんな場で、大人が泣いたらいかんのかなあって思ったけど、出るものは仕方がなくて。

R先生 「コスモス」から始まったでしょう。本当にあの子たちは親のことを思っているのね。

S先生 あの時、M子も泣いてたね。

R先生　すすり泣いていた。私の横で。

T先生 「さだまさし」の婚約者が亡くなった歌に、M子はグツときたんだね。

R先生 M子は「感動する心がなくなった」と話していたことがあったけど、感受性はあるよね。

S先生 うん、そう思う。G男にね、「私もみんなも泣いてしまっ  
た」って言ったら、「選んだ歌が歌だったから。でも僕としては歌  
の心が伝わるように歌ったつもりだから、そう言ってもらえると  
嬉しい」と言っていた。

R先生　G男がね「あんまりエネルギーないので、感情がこめられないで、ごめんなさい」って、最後に言ったでしょ。あの言葉がまたすごいなと思った。

(中略)

Q 先生　小グループで話を深めたかったという思いもあったけど、  
R 先生　でも初めての体験ばかりの中で、話が深まると心配な気も

する。合宿というだけで、あの子たちにとってはかなり大変なん  
だと思うよ。

Ｔ先生 その場で過ぐす事がやっとだろうと予測していたけど、その予測よりもみんな動けたように思うけど。

S先生 私なんか、学校では非行の生徒と関わる事が多くて、他人への求め方がねじ曲っているのに慣れているからか、あの生徒たちがとても素直に求めているなあって思っ

R先生 T先生があの子たちを「きれいだ」と言われたのが、すごく印象的だった。こちらの心がなごむというか…。

U先生　こちらが、知らず知らずのうちに純粹になってしまっている。

P先生 全体の感想として、生徒たちだけの場を設定してもよかったです。ではないか。

R先生 私もそう思う。わざわざ設定しなくても、流れの中で、例えばギターが始まった時に、私たちが抜けていくとかね。

Ｔ先生　同じ場所に居ても、少し離れて大人の話をしている  
もいいしね。

Q先生　今回は、A男が心細がってP先生やT先生につきまとうた感じがするけど、こちらが全く手をひくと、同室のG男がA男の面倒をみなくてはならなくなる心配があった。

S先生　そうですね。A男はゲームにのって少し興奮してたから。

U先生 ゲームにのったけど、その後でその喜びを分かち合う相手がいなかった。

P先生 親の話はあまり出なかったね。

R先生　一泊二日ではね。それに今回は、大人が多過ぎた。高校生があと四人くらい居たらよかった。

P先生 やっぱり、合宿はリクリエーション程度がよく、深く入る必要はないと思う。

## 手記「合宿を終えて」

—L子—

昨日から今日にかけて、合宿、どうもありがとうございました。とにかく一言、私としてはとっても楽しい合宿でした。そしてとっても勉強になった合宿だと思います。私はいつも人と話すとき、ものすごくつかれます。しかし今回の合宿は違いました。つかれるどころか楽しいのです。

私にとってこの合宿は精一杯自分を出せた、自分に正直に行動できた二日間でした。私は今まで正直な本当の自分を出せず、本当の自分に自信がなく、「こんなことを言ったら嫌われるんじゃないか」と思って、自分をかくして人のことばかり気にしていました。そして「人を信じられない」とか、「人と話をしたらすごくつかれる」とか言っていました。けれど、自分が人を信じないで本当の自分をおくしていたんでは、自分のことを理解してもらえないのは当然です。「まず自分自身が人を信じて、自分のすべてをみせて、人に接してみよう。そうしたらもっと楽になるんじゃないかな」と思い、それと同時に、高校へ行く決心をして一人で家で勉強してたから、親とは何でも話せるようになったけど、近い年の友達に「本当の自分わかってもらおう」と思って話すのは、今回が初めてだったんです。何かとてもむずかしいことのように思ったけど、はじめに自分をかざることなく出していえば、あとはかんたんでした。ありのままの自分で人と接するってことは気が楽でした。ありのままの自分をお互いに出し合ってこそ、本当の友情がうまれるんだなあ、こんな友情こそ強い本物の友情だと思いました。

Mさんが良かったせいか気が合って「これでいいんだな」と思いました。（Mさんだけでなく、もちろん他のお友達とか、先生方に対

してもです。）ありのままの自分を出す勇気ができました。これから始めようとしている高校生活のうえでも、ありのままの自分を出すことができそうな気がします。

そしてもう一つ大きなことは、「みんなも私と同じようなことで悩んでいるんだなあ、共通しているところがあるなあ」と思い、何か安心しました。私は短期間家を出て、仕事をしてみて、実感として高校に行こうと思ったけれど、そう思うようになるまでにいろいろ悩みました。「ああ、苦しいだろうな」というのは、もう痛いほどよくわかります。

それと反対に「よかった」という気持ちも、たしかにありました。「私だけがこんなに深く考えておかしいんじゃないか」と思ってたけど、今日集まった人たちも、みんないろいろ考え、悩んでいた仲間です。私だけじゃない、同じ悩みをもつ仲間がいると思うとなぜか心強いです。

特に一日目の夜、私とMさんとUさんとおしゃべりしてた時、みんな少しずつ自分の今までのことを話すようになって、これからのこととかを話しました。三人共、今学校には行っていないせん。自分のことを話しやすかったです。しんくく進路の話ではないけど、「こうしたいほうがいいんじゃない」とか、軽く話しました。私は同年代の友達とは、最近ずっとお話をしていないので、うれしかったです。夜中まで、三人共いろいろなお話をしました。進む道はみんな違うけど、共通してるところがありました。私にとってはありのままの自分を出してお話してたせいか、「三人共の心が通じあつとるんやな」と思ってたうれしくなりました。

他に、いろんな先生とも少しずつお話して、すごく親しみを感ずきました。そしてあつという間に二日目。二日目はギターがとっても心に強く残りました。とくに「秋桜」のときはおもわず涙が出そうになりました。「秋桜」は、私が入学した高校を休学し、県外へ行っ

たとき一人の部屋でよく聞いた歌でした。いろんなことが思い出されて、こんな合宿に参加している今の自分がすごくうれしくなっていて、昨日と今日、ありのままの自分を出そうとしている自分に満足で、うれしくって涙が流れそうになりました。〇〇くん（名前を忘れてしまった）の歌い方は心がこもっていて、ギターもじょうずで、すごくよかった。テープに録音してほしいと思った。

こんな感じで、今「ほんとうに行ってよかった」と思った。すごく楽しかった。初めての企画としては上出来だと思った。私としては高校へ行ったとしても、こんな合宿にはぜひ、ぜひ参加したいと思います。今回の合宿って、ほら、そのときそのときに「何しようか」とみんなで話して決めたやろ？ふつう、そんなのって、意見が出なかったりとか、ばらばらになったりするけど、決めながら進んだわりには着実で、中味があったと思う。こんどからも続けていきたい。忘れられない思い出になると思います。これでみんなお友達なんだし、みんなで時々会って、現在の自分のこととか話し合いたい。先生たちは先生たちで、私は私らだけで気楽に話すのもいいと思う。

何かいろいろ話したけど、私にとってすごく良かった合宿でした。おもしろかったです。ますます高校へ行きたくなってきました、手紙を書いたら、すぐまた勉強をするつもりです。今日と昨日、いっしょに泊った友達とはこれからいっばい話して、いろんな人の話を聞いて、私も人間的にもっともっと大きくなりたいです。どうもありがとうございました。

## 五、フォロー・アップ

解散後、スタッフは保護者に電話をかけて合宿の内容と、その生徒たちについての報告をした。その後、保護者の方で合宿の影響ではないかと思われる事があったら、スタッフに連絡してもらおうよう

に告げた。

合宿実施一週間後に、参加者が自ら卓球大会を企画し、当センタ―で二時間程「共に過した」が、この後、三月末まで個別的な面談をスタッフの方は続けた。

## 六、効果

EGだけの効果測定は不可能である。というのは、個別の面談の流れの中での合宿であるからだ。しかし、大まかに言えば、合宿はしないよりもした方が良いように思える。生徒が時折見せる少年らしい笑顔は、個別面談では見られないものであるし、L子の手記のように、人と共にあることが楽しいと思えた生徒もいたということである。

ここに第三回目の合宿後のデータがある。参加者一二名（男子七名、女子五名）のうち、所属校へ戻れたのが三名、別の高校を受験し直して現在通学しているのが三名、アルバイトを始めたのが二名、精神科へ通院しながら通信教育や絵もしくは音楽、あるいは軽作業をしているのが四名となっている。

とにかく、合宿へ参加できると言うのが、この生徒たちにとっては大変な事なのである。だから、私たちは合宿の効果よりも、その事実を高く評価したいと考えている。

## おわりに

高校生のEG実施例が少ないようであるが、校内での実施はクラス担任や相談室担当者が準備とフォロー・アップを丹念に行いさえすれば、効果があるように思う。生徒同士の絆や生徒と教師の信頼関係がつけられるということ、かなりメリットがあると思われる。

## ゲシュタルト・セラピーの訓練を受けに行っていたときの話(1)

福井康之

海外へ出かける人は多いので、何をしに出かけていたのだろうかなんて、人は氣にとめなくなっている。帰って来てから三年近く経って、想い出してくれる人がいて、書けといわれた。しゃべりたいことは一杯ある。

一九八六年三月二十五日に成田を出て、翌年一月二十四日にロスから帰国、十か月の文部省在外研究員として「ゲシュタルト心理療法の研究のため」ロサンジェルス・ゲシュタルト・セラピー研究所へ客員研究所員として留学したということになっている。

文部省へ提出した渡航説明書は次のとおり。「人間中心主義（自己実現論）的立場で個人

面接（カウンセリング）と集団療法（エンカウンター・グループ）の実践と研究を続けてきたが、さらにその研究の方法の巾を広め深めるため、フロイトの弟子であり、精神分析と人間中心主義的立場を統合し一派を開いたパールズ・Fの創始によるゲシュタルト心理療法をロサンジェルス・ゲシュタルト研究所特に人間性開発運動の中心であったアメリカ合衆国西海岸には、これらの研究を精力的に実践し発展させている後継者が多く集っており、彼等と学問的交流が期待でき、今後の研究に寄与するところ大である。なお、わが国にはまだゲシュタルト心理療法についての紹

介普及がほとんど行なわれておらず、個人の研究の発展のみならず、学会への貢献を望んでいる。」

\*

というわけで、帰ってから、早速「心理臨床学会」（一九八七）で、倉戸ヨシヤ氏に協力を求めて、自主シンポを開いたというのがささやかな貢献の一つ。持ち帰った資料の一部を配布し、ホット・シートの実習中のビデオの一部を見てもらった。好奇心からかも知れないが、満員の盛況で、廊下の窓からのぞいてもらう人まで出来る程、大勢集まって下さった。期待に沿えるだけの情報が提供できたかは疑問であるけれども……。



もう一つ、今刊行中の『二〇世紀の心理療法』のアービング・ポルスターの講演の訳を村山氏が割当てくれたことも、うれしかったことである。この人はスペイン語を話す人ではないかと思う。スペイン語は主語を省略する。主語なしの動名詞でやたらと文章を続ける英文で、難解なことおびたしい。幸い内容が何を言っているのか、実際に見聞しているので見当がつくので、出来上った。百読は一聞にしかず(?)

奥さんのミアンの講演は、倉戸氏が訳している。この夫妻がパールズ直系の第一の後継者とされているが、当地での評判は奥さんの方が力量が抜群とのことである。

始祖パールズのことを研究所の人はパールズと呼ぶので、最初判らなかつた。↓の次のsはzと濁ることになっているし、もともと



ベルリン生れのユダヤ人だからsは濁るのだろうと思うが、変だ。しかし、少くとも、フリッツと親しく呼ぶ弟子はいなくなつて、パールズ先生という感じで呼ぶ孫弟子が活躍している時代なのだろう。なにしろ、パールズは一九七〇年に七十七才で亡くなっている。われわれの多くはパールズを「グロリアと三人のセラピスト」の映画で見知っていてイメージするが、私は「Gestalt Therapy Verbatim」(一九六九)のカバーの写真の方が好きだ。白いモジャモジャのアゴヒゲが生えていて、いたずらっぽい、鋭い、暖かい目付がいい。

ゲシュタルトというと、その方が正確だといつてくれたが、おわかりのとおり、ジェステールトと発音するので、何だかピンと来ない。私自身がゲシュタルト・セラピーの名称を知ったのは、東京オリンピックの頃で、二十五年以上も前のこと。沢田慶輔先生が京大へ集中講義に見えて、まだ大学院に籍を置いていた頃で、ゲシュタルト・セラピーというのがあるそうで、ゲシュタルト心理学と関係があるのかどうかよく解らないという程度の紹介であつた。

当時、行動療法に熱中していたので、心理学の行動原理に基づく心理療法だとするならば、是非知りたいものだと思つた記憶がある。後

になつて判つたことだが、少くとも一九七五年にはゲシュタルト・セラピーに関する本が二〇冊は刊行されており、一五冊が熱筆中だったと、ベアリー・ステイブンス(ロジャーズと共著で「Person to person」があり、「Don't push the river」は名著とされている)と息子のジョン・ステイブンスが書いている。にもかかわらず紹介する人がいなかった。

出かけるまでに、もっとゲシュタルト・セラピーについて勉強しておくべきだったと反省しているが、今に至つても、資料や本が溜っているだけで、たんねんに読む暇がない。ゲシュタルト・セラピーについてレビューする本でも書けば、少しは真剣に読む気が起るかもしれない。やるべきだとは思っている。

それに、実践をしなくてはならないが、ホット・シートの設定で、練習だからと、身近な人でたまたま面接を続ける必要のあつた人に頼んで、二人だけ、それぞれ約半年間やつてみたところである。少しやれそうな感じがしてきたので、夢分析を次はやつてみようかと考えているところだが、これは小道具(いくつかの色違いのピロー)が目下ない。

ジョン・ステイブンスは「awareness」という、実習手引書を書いており、これはstructured gameに使える便利な本だ。この本

を持っていて、暇にあかして訳していたが、結局、第一部（全体の $\frac{1}{4}$ くらい）までしかできず、帰ってから思ったが、何のことはない、社会産業教育研究所の岡野氏のところで、訳本が出版されていた。訳もなかなか立派で、ファシリテーターをやっている人は座右の書にしてよい本だ。当地では絶版になっていて、逆に持って行った本を見せると、一緒にやっていたトレーニーの人たちが、コピーさせてくれとって貸したことがある。

ステイブンスに会いたくて消息を聞いたら行方不明だということ、亡くなったという人もいて、帰ってから倉戸氏に聞くと、氏は彼と一緒にいたことがあるとかで、今はゲシュタルト・セラピーの陣営から離脱したとのことである。彼の兄弟の一人が交通事故で亡くなったので、そんな噂になったのだろうということだった。

閑話休題。もとへ戻って、文部省在外研究員の選抜の仕方は、各大学・学部によって事情が異なる。うちの学部は一〇一名いるのだが、大学全体で決めるので、二年に一名しか原則的に割当がない。意志表示を早くからしておいて順番待ちである。希望を早く出したからといって、その回数は選抜条件に加味されない。毎回出して協議する。希望者同士協議してもラチがあかないので、とうとう、

すでに行ったことがある人のなかから委員が選ばれて審査することになった。

あなた任せで、行けるかどうかわからない。大抵の人はあきらめて書類を出さない。馬券を買うように予測しながら出す。買う本人と走る馬が一緒なのだから人間関係がまずくならないことおびたらしい。ひどい話だ。私はとうとう最後の切り札で最終レースに臨んだ。資格が五十才で終るのである。前年も英語の教官が五十才でイギリスへ行った。その年は順番が回ってこないのだ。で、学部長が学長に直談判してくれて、五十才で最後のチャンスだからと順番を一年繰りあげて行けるようになった。ウルトラ・Cなんだが、風当りは強い。五十才になって行っちゃって研究の成果は還元できない。若い教官が留学してこそ意味があるというわけ。急に思い立って希望したわけじゃないし、若い時にチャンスが来ないから今になったんだ。それに、年をとってこそ、見えるものも見えてくるんで、若僧が行っちゃって、やたら興奮して見えるものも見えずに帰ってくるだけじゃないかと、鼻息は荒かった。

出かけて行って、五十才にもなってよく来たなと言われた。皮肉じゃなくて、歓迎してくれたのだが、“You are a curious man”という。好奇心の強い男だといわれたのか、変

人だといわれたのかいまだもってわからない。だいたい、行けるかどうかわからないから準備も本気でやれてない。毎回提出していた書類は首尾一貫していて、ゲシュタルト一本槍で、いざ、現実に行くことになったら、記入していた住所には研究所はとくに移動しないで、返事が来ない。仕方なく、他の研究所へ引き受け可能かどうか問い合わせの手紙を出した。それが続々と住所不明で帰ってくる。なにしろ、十三年前に二十日間団体旅行にくっついて夏休みのUCLAのドミトリへ泊りに行ったとき、帰りにシスコのイサリン研究所へ寄って入手した名簿だから当り前である。金沢大学に在籍している頃から、すでに下調べに行っているのだが、こんなに月日が経ってしまうと何の役にもたない。もっとも、この時はラホイヤ・プログラムに参加しに行くのが主目的で、当時留学中の村山氏の世話になった。

お手あげである。なにしろ七月八日が来ると五十一才になる。それまでに受け入れ書類をもらって手続きをしなくてはならない。倉戸氏に会ったとき、困っていると話したら、シスコの研究所なら紹介してくれるといってくれて、最後は頼むしかないなと思っていた。シスコは全米中一番住居費の高い街で、それに日中は半袖でも夜は毛皮のコートを着て歩き、暖房しないと夏でも寝られないという厄

介なところで行きたくなかった。

幸いなことに、ロスの研究所へ出した手紙が、当時の所長だったジャネット・レインウォーター女史のところへ回送されて、ヨーロッパ旅行中だったので返事が遅れたと、新しい研究所の住所と現所長のヨンテフ氏に直接交渉をするようにという手紙が来た。そこで急いで連絡をとると、ビギナーの訓練はしていないということと、フォレイナーの受け入れは目下計画がないという返事であった。

再び暗礁に乗りあげてしまった。そうするとデンバーの研究所から受け入れてもよいという返事が来た。で、行くことにした。ところが、文部省は計画の変更を理由なしに認めない。正直に理由を書けば、計画の杜撰さが問われる。そこで、再び、ヨンテフ氏に手紙を出し、ロスの研究所員として在籍して、ビ



ギナーの訓練は別のところを自分の責任でワークショップを探して受けるから、身分の保証をして欲しいと頼んだ。O・Kということと書類が整った。結果的にはデンバーへ出張するより、ロスへ在籍したので、大都市手当がついて、その差額で訓練のための費用が捻出できた。なにしろ、わが家の家計で、出張手当以外の金を持ち出す貯えがない。もちろん単身赴任で、自炊をして暮した。最悪の場合パンだけかじって暮しても、半年くらいは大丈夫という戦後体験の自信がある。幸いドル安にどんどんなっていて、今より高いが、一度にドルに換えずに、毎月換金して送金したので、これまた差額が稼げた。

ロスのモーターで一週間滞在して、英語に慣れて置いて、四月に入って、デンバーへ行った。研究所は正式には、Gestalt Institute of the Rockies という。デンバーはロッキー山脈の中腹の高原にあり、人口四〇万。ロッキーのふもとの街ボールダーと並列して、夏も涼しい観光地だ。トレニーの半分はボールダー（高速道路で二時間程）から来ていた。着いた日は雨で肌寒く、翌日は雪が降って積もった。所長はベス・プロスロー、私より三才くらい歳上のおばさん。問い合わせの手紙が届いたのは、研究所の住所が、連絡先の自宅になっていたからという偶然から世話にな

ることになった。

デンバーの空港から、辞書や電池まで詰め込んで、重量オーバーで三〇ドル余分にとられたトランクを積んでタクシーで自宅へ行った。住所の番号は一致している家へ到達したが、表札の名前が違う。ジョージ・ドーベニューラー・ジュニアと書いてある。渡したメモと見較べて、運ちゃんは名前が違うと気の毒そうな顔をして、それから、自分の仕事は済んだという顔をして、帰りそうなので私はあわてた。

アメリカ大陸のど真中の見知らぬ家の前で、手で下げて一〇メートルも歩けない重い荷物のまま残されては、次にとるべき手だてがない。到着した日はホテルに泊るべきだったと一瞬後悔したが間に合わない。とにかく、その家の人に聞いてみようと思って、中へ入った。扉は鍵がかかっていないのに人の気配がない。雨で暗くて気がつかなかったが、扉に張り紙がしてあった。ミスター・フクイと書いてあるので、運転手に大丈夫と帰ってもらった。「研究所へ行っているの、待っているように。犬はフレンドリーで恐れる必要はない」とあるが、私の身体程の大きさの犬が三匹もこっちを見ている。コリーとおぼしき奴はなるほどフレンドリーで尻尾をゆらゆらさせているが、セパードは遠くから警戒してこちらへ来ない。とうとう最後まで、このセ

パードとは仲良くなれなかった。だれとでもそうらしいが、出会いは相互的で相手にもよる。

待つうちジョージの方が先に帰宅。ライトニングがどうしたとかいうが、稲光りの話だとなかなか判らない。実は彼が以前所長だったのだが引退している。奥さんや成人した息子と別居していて、部屋に写真が飾ってある。ベスはジョージとゲシュタルト・セラピーの訓練中に知り合って、同棲しているというわけだ。一週間程この家に滞在して、あらかじめ探しておいてくれたアパートへ落ち着いたが、その間やその後のこのカプルの観察結果から、ベスがジョージにとても気をつかっていた、尽くしているという感じにはおどろいた。ジョージはもつと歳上で、じじいである。ベスは食事を作るのが仕事で遅くなったから、おおいにあやまっている。ベスはもちろんコロラド大学出身でPH・Dを持っている。アメリカの女性はもつと威張っているかと思っていたら、そんなことはない。どこの国も賢い人は威張らないのだと感心した。

ジョージはエンジニア出身だが、経営コンサルタントの様な仕事をしている。半分は家に居て、コンピュータを使って仕事をしている。ヘンリー・フォンダそっくりで、中折帽をちょっと傾けてかぶり、コートを引っかけ、とても格好がよい。私になんか負け

てはいないと、重い荷物を替りに持ち上げたりして、いいところを見せる。それに親切で気軽にどこへでも頼めば連れていってくれる。それに、ベスのトレーニングには一切口出しはしない。

トレーニングに個人セッションがあり、私は特別なので、ベスとの個人セッションのことはジョージにも話すかと聞いたら、セラピストは個人セラピーで話すことを夫に話すことはしないとしっかり言われてしまった。当然のことだけれど感心した。ジョージとは気があって楽しかった。音マニヤで、テクニックスのステレオを家の真中の部屋に組み込んでいる。日本製はいいといってくれる。日本人としては鼻が高い。第二次大戦で、父親がこの国の人と戦って死んだということやおかげで、自分の人生がどれくらい苦勞をさせられたというようなことが嘘みたいだ。

人間が組織や国といった集団の規範で動くことのないように、個人と出会う体験をどうして大事にしないのか。一生かかって叫び続けたものだ。

デンバーには結局九月中頃まで滞在して、春と夏のセミスターに出席し、一〇〇時間の訓練を受けたという証明書を貰った。年間四セミスターあり、通算二年でライセンスが貰える。どちらにしても、ライセンスを得るだけ

け時間はとれないから、秋期のセミスターはキャンセルして、もともとロスの研究所員だから、ロスへ帰ることにした。期間中、ストラクチュードのゲームをしたといったら丸一日の日程だが、他の参加者を募集して、トレーニングの何人かと一緒にベスの自宅でワークショップをやってくれた。

各セミスターには必ず一回丸一日のワークショップがある。夏期は人数が増えて、トレーニングは夜と昼とに別けてセッションがあったが、私は両方ともに出席した。ライセンスを貰うためには、必ずしも連続してセミスターに出なくてもよい。通算八セミスターでよいので、丁度、春のセミスターで終了した先輩格のトレーニングがいた。このようなベテランが、正規のトレーニング・セッション以外に新米のトレーニングを集めて訓練するのもプログラムの一つになっている。これがまた、平日ぐらいの時間で、週二回はある。とうとう音を上げて、サボるようになったが、実際は一〇〇時間どころではなく、もっと沢山の時間出席したが、語学のハンディから、割引してある。

どの様な訓練がされるのか詳しく報告をしたいが、それは次の機会にしたい。メモがとってあるが、忘れてしまわないうちに整理したいと思っている。果して興味を持っていただけのことなのかどうか編集部に打診して

からということにしたい。

さて、ロスへ移動するのに、引越越し荷物を送るにも宛先がない。アパートは行っただけから探すしかない。もともと迷惑はかけない約束で、何でも自分でするしかない。デンバーで、何とか経費の見通しがついたので、ジョージに頼んで、安い中古車を見付けてもらった。仕事上の知り合いの人がチープ・ヒップスというレンタカーの会社をやっている、ジョージの説では、中古車センターより、レンタカーの方が手入れができていて有利だという。それに比較的年代の新しいのを安く払い下げる。手入れはよいかも知れないが、使用頻度は多くて、使い方が荒っぽいのではないが、ジョージに任せた。

七九年フォード・ピントナーが一〇〇〇ドルだった。三か月程乗って、これに世帯道具



を乗せてロスへ行くことにした。一日かかってニューメキシコ州のアルバカーキーに着き、次の日はアリゾナ州のフェニックスまで、三日目にロスへ到着。それぞれモーターを電話で予約しておいたが、市内へ入って探すのに一時間はかかって日が暮れてしまった。とにかく砂漠を通過して、ロッキー山脈を越すわけだから、三日間で車の運転に飽きてしまった。アメリカの車は一週間に一回はエンジンオイルを入れないと蒸発してしまう。日本車はエンジンオイルを自分で入れるというとはまざらない。知らなかったのが、モウモウと煙をあげてエンジンを焼いてしまった経歴のボロ車で、よくたどりついたと感心している。ロスへ着いてから三日目にパンクした。スベアタイヤもジャッキもいざ使おうとしたら全然合わない。よく途中でパンクしなかったものだと、いまだに考えると青くなる。下手すると生きて帰れなかったかもと。九月末で実際に途中でロッキーマウンテンで雪が降ってきたのだから。

ロスの研究所では、十月から中級コースのトレーニングが始まる予定だった。ところが希望者が集まらないので中止になった。もっとも、デンバーに行っている間に、また、研究所が移転してしまった。今度はサンタモニカの海岸の傍の洒落た建物で、行って見ると

待合室はいつもクライエントが来ていて、所員は皆面接で忙がしい。所長のヨント博士を始めとして、レズニック博士など錚々たるメンバーの集りで、とても相手にしてもらえない余裕はない。研修担当はパム・ペイジ・シュミットさんで、ヨント博士はこの人と相談しろという。目下研修中の人と一緒になれるかと聞くと、その人たちは短期間顔を出すような人は駄目だといっているという。

もっともなこと、結局、パムさんに面接してもらったことになった。これも最初は断られたが、面接料金(一回八〇ドル)を払うから、クライエントとして会って欲しいと強引に頼み込んだ。他の所員も次々と来る人と面接していて、雑談をするチャンスがない。ずい分と稼ぐのだなあという印象だった。

パムさんはベルリンから来た所員のひとと結婚している。なかなかの美人で、最初から一目惚れして、やっと毎週一時間話が出来るようになった。口説きに行ったわけではなく、自分の話をしに行ったわけだが、クライエントになるという得難い経験を惚れ惚れとする美人と話しながら、楽しくやれた。何が幸いになるかわからないというこのきわめて貴重な一例というべきか。(つづく)

## 出 会 い 百 選⑦

### 金沢ヒューマニスティック 関 丕さん

畠 瀬 直 子



出会いには、自分の歩みを確認する出会いがあるようだ。私にとって、ひろさんとの出会いがそうである。ひろさんにはじめて会ったのは、カリフォルニアで、彼女がロジャーズさんに会いにこられた時である。

迎えに行つて、自転車からおりると、ブルーのワンピースを着たボニー・テールの女性が目にはいった。たぶりのスカートが風にゆれ、さわやかさを絵にかいたような、今にも踊りだしそうな、はちきれんばかりに元気なひろさんが立っていた。二人とも、本当に若かった。

日本から女性が来ると聞いた時、私は飛び上がるほど嬉しかった。二十二年前、日本とアメリカは気が遠くなるほど離れていた。嬉しさを表す時、日本人は何かごちそうを作るのだろうか。私は何か作らなくてはならないと考えて、日本からきたあずきがあるの思い出した。ひろさんを迎える前日、私はおしるこ作りにとりかかった。恥ずかしい話だ

が、学生結婚をした私は、花嫁修行ゼロの出発だった。あずきを一晩水につけなくちゃいけないなんて、もちろん知らなかった。カリフォルニアの乾いた空気でカチカチになったあずきは、炊けども炊けどもやわらかくなくてくれなかった。何時間も炊いたけど、とうとうやわらかくならなかった。出来あがつたおしるこは、どこかコチンとした歯ごたえ。私の未熟さをシンボライズした味がした。

ひろさんは、未熟者の作ったおしるこを、喜んでたべてくださった。

「パッチンしてーおばあちゃん」

朝日新聞の天声人語でひろさんの名前を見た時は本当に驚いた。ひろさんは、英語教師として、生きた英語教育づくりに熱中してきた人である。英語に魅力を感じない生徒達の心に触れようと努力され、心が開かない気持ちをみつめ、いつしかカウンセリング活動もスタートした人である。最近カウンセリング・マインドを暮らしに役立てようとする動きが活発だが、ひろさんの生活にはそれが満ち



ている。

ひろさんのお母さんに一度お会いしたことがある。「こんな平和な笑みをたたえた日本女性がいたのか」と驚かされ、トゲトゲした部分のある自分が恥ずかしくなった。私も、ひろさんのお母さんのような母親に育てられたかったのかも知れない。そういえば、私の母はユーモラスなアイディアおばあちゃんなのだが、あのおおらかな包みこむ暖かさが乏しい。

そのひろさんのお母さんが、脳血栓の発作で寝たきりになったのだ。ひろさんは、彼女の世界をカウンセリング・マインドで満ちた人々でいっぱいにしていたようだ。たくさんの人々が手伝いに駆けつけた。ひろさんと仲間達は、おばあちゃんの目をあけたり閉めたりして示す意志伝達力に気づき、それを最大限に活用していった。人と人が交流するとはどういうことを多くの仲間と実践していったのである。その活動を伝える記事が「アッブジョン医学記事賞」を受け、「パッチンして！おばあちゃん」の本になった。そのことが天声人語で取り上げられたのだ。この記録は、老化によって自由を奪われた個人と看護者の関係に光を与える『バイブル』として役

立っていくに違いない。

「日本では、僕の理論がどんな風に吸収されていますか？」ロジャーさんの質問に答えられずにお別れしたが、ひろさんの実践はひとつの答えである。また、カウンセリングは専門家が独占してよいものではないと考えさせられる。

### ひろさん健ちゃんコンビ

ひろさんは、今、石川県教育センター相談課長である。石川県の教育相談にとって要といえる重責である。彼女を補佐し、相談活動の豊かな展開を支えているのが徳田健一さんことケンちゃんである。私の手元に昭和六十二年度相談事業概況がある。貴重な活動だなと感心させられるのは、各種機関との暖かい連携である。このことが日本社会でどんなに生み出しにくいかを、相談機関で働く方々はかみしめておられるに違いない。

各機関に縄張り意識と競争心が無意識裏にあることで、私はどれだけ苦労したかしかない。「ここで指導を受けたいのなら、畠瀬先

生のところに行くのをやめてください」「それで、ここであまりいかなかったら、どうしたらいいんでしょう」「その時は、また畠瀬先生の所にお願ひしてください」

お笑いでもなく、これが現実。時には、表むきは私の指導を離れたことにしたこともある。過敏に揺れる子供を見守るには、どうしてもその長い歩み全体を知っている人が必要だからである。公的機関は年齢で切られるところが多いので、長く見守る人が必要になる。

大樹は複雑にからみあった根に支えられているように、不安定な個人も、様々な関係に支えられているほうが強い。そのことが、この国では実現しにくい。

石川県教育センターの人々は、その壁を個人援助・可能性尊重の熱い思いで溶かしたようだ。

### 女性課長のメリット

ケンちゃんの話しを聞いていて興味深く感じたのは、女性課長と男性課長の違いである。森山内閣官房長官は、男性にひけをとらない

くらいアルコールに強く、飲み会をどんどんクリアールして、今日を築いてこられたと聞いた。女性が男性と肩を並べるとはそういうことかと思った。

ところが、ひろ課長のもとでは飲み会が少ないという。これは部下にとってはありがたいのだそう！そういえば、現在は共働きが社会の主流である。若い男性は、家庭にあって大切な力である。パパとママが力を合わせなくてはならない所を歩んでいる。早く帰れる方が体も楽だというのを聞いて、これは本当に大切なことなんだと思った。女性管理職がふえると、社会の風習も変化していくのかも知れない。

三世代家族の難しさなども、いつしか自然に語り合ったりして、これがとても役立つそう。そういえば、私達の目前には、こういういった考えなくちゃいけないテーマが山積している。

宮崎事件をめぐるっては、様々な意見が噴出して、精神科医の父権失墜論も力を持っている。天皇を父とした国家、各家庭はその分家で、父は天皇のような権力者だったとする意見まである。その時代、貧しい家庭の娘達は、歓楽街に身売りし、家族の人柱と

なって病で終わる短い人生を送っていた。どうしてその時代を美化することができよう。子供の人格をすこやかに育てることはいつの時代にも難しい。男が女々しくなった等と言

## ユニークな活動の展開

援助関係の輪をひろげて子供達を守る活動は、着実に根を延ばしている。たとえば、千五〇〇人規模のある中学で、二〇名の不登校生徒が出現した。そこで、親の会を作って語り合うことにした。子供達の担任や校長も参加したいと言出し、親・教師・校長・教頭そしてセンターのスタッフが共に語り合いを持つことになった。その会は、もう一年以上続いているという。

高度技術社会を支える高い教育水準は、精神的疲労を子供達に与え、不登校問題は増大する一方である。この難局をどう乗り切っていくかは、私達共通の課題である。教育ママがいけない、父親の弱さがいけない等と責められず、学校で共に考え合えたら、親達はどんなに心強いことだろう。本当に貴重な実践だと思う。

高校生グループも生まれたようだ。高校をやめてしまう子供達の増大も今日の問題であるが、「ぼくどこへ行ったらいいんや」とい



●ひろさんとケンちゃん

わないで、もっともっと頭を寄せ合い語り合い新世紀に向かいたいと思う。ひろさんケンちゃんコンビのような職場がもっともっと増えてほしい。やさしさを機軸にしなやかな人格を築ける時代にしたい。

う少年のつぶやきがケンちゃんの耳に聞こえたのだそうだ。これが彼を動かした。一年ほどの努力で、十名ほどの中退者の相互援助グループが生まれたという。ここに参加するまで、一年以上も家を出なかった子供もいるそうである。同じような苦しさをかかえる友人を見いだし、支え合い、一步一步前進していけるなんて本当に素晴らしい。

不登校の子供のための高校もできた。でも入学金一〇〇万円、一ヶ月の必要経費十万では、平均収入の一般家庭では入れてやれない子供達が、自分の力をゆくり開花させていける場が、様々な形で必要である。ケンちゃんの活動が花開くよう願ってやまない。

## 結婚いろいろ

久しぶりにひろさんに会って、どこかしつとり落ち着いたのを感じた。どう考えても、原因は結婚としか思えない。カリフォルニアでの出会いから、踊りだしそうに元気なひろさんイメージは変わったことはなかった。その彼女が、どこかしつとり落ち着いている。

ひろさんの場合、五十を過ぎての結婚である。ひろさんが結婚された時、私は内心邪魔ものがはいったと感じた。「直子さん、退職したら、アメリカやヨーロッパを一緒に歩こう」女兄弟を持たない私は、その言葉に飛びついて楽しみにしていたからである。

ひろさんに会って、そんなことを思った自分が恥ずかしくなった。そして人生を共にするコンパニオンがいかに大切か考えさせられた。人格がしっかり固まった後の出会いと共同生活は、若い出会いより難しいと思われるのに、こんなに人を変えるなんて！

こんな一文を加えたら、ひろさんに叱られそうだが、人生八十年時代にはさまざまな結婚が必要だと思うので、どうしても加えたかった。天国はジェラシーのない所と聞く。老いを感じる年になってからの結婚を心からうけいれたい。

金沢で旧交を暖めた私は、自分がどんなに微力でも、人々のためにそれを使わなくてはならない第一線年齢にいるのを確認した。



- 清里プログラム'89で、パーティ係が  
即興で描いた心象風景  
(「ばあそん・せんたあど ワークショップ清里」  
「H.1.8.11」とある)

●即興で作製した歌詞カード

(110×150cm)



# 言葉の向うの風景

水田 勲

「言葉」というものについて考えております。どうも言葉だけでは伝えられないものがあるようで、上っ面の言葉だけで話し合っていて、それで反応し合っているようなのです。言葉の向うにある何か、そのことについて、今いろいろと考えさせられました。

一見、乱暴な言葉を使いながらも、素直な誠実さであったり、気づかないまま相手を言葉によって傷つけていたり、はたまた、お互いに相手の気もちをくみとってあげてなかったり、言葉で自分の意思を伝えていくことのむづかしさを、感じ、考えさせられました。」

全セッション終了後のミーティングで、Kさんの語った言葉である。僕なりにとらえた大意で、まちがいあれば、許されたし。

Kさんの投げた石（ことば）は、僕の心の中で波紋を生じさせた。何人かの同意、意見の後、僕は口火をきった。……。

あれから二ヶ月たった。今覚えているのは、「ことばの真意」「人と人との共通感覚」「偶然性の妙味」「魂レベルの情景」を、僕なりに

語ったこと、そしてあの四日目午後の、自由時間の森林浴歩行の素晴らしさ、パーティの成功、Kさんの描いた絵の好印象を口にしたことである。特に童心に帰っての、十二人の学級遠足は、愉快愉快爽快であった。それはそのまま、Kさんの描いたほのぼのとした画風にびったりと合うものだった。彼の人柄をも物語るこの風景は、まさしく彼の語った「言葉の向う」の心象風景ではなからうか。彼の言いたかった真意ではなかったのか。ある確信を、時間がたつにつれ、僕はもっていった。

牧歌的情景。牛たち。草っ原。画面中央に横一列の子どもたち。みんながほほえみ、そして手をつないで座っている。

僕を感じ。ほのぼの。違いをもった個々の共同連帯感。なかよし。小学校時代。どこか、なにか、なつかしい感じ。

「パーソン・セントアード・アブローチ・ワークショップ・清聖」は、僕にとって、今までのワーク体験とは異なり、今回の実感な

り体感、五泊六日にして始めて味わえる素晴らしいものであった。本当にありがたいもの、それこそ気もちのレベル、言語表現など及びもつかない、あのKさんの絵そのものの風景、それこそ其を得ているように、僕は感じている。

この清里での皆さんとの出会いは、あの絵の中に描かれた登場人物として納まっていることで、「なるほど」とうなづけられるのである。

「皆さん、お元気ですか？  
パーティで、司会をした水田です。

Kさんのオルガンひき、「遠き山に日はおちて」聞こえますか？

皆さん、まぶたを静かに閉じて下さい。  
……、ありがとうございます。」

●みずた いさお  
風景写真





## 清里を想う

中 坪 千夏子

私にとって今回の清里が、全く初めてのエンカウンター・グループへの参加でした。少し本で読んでいたものの、この五泊六日の合宿に何があるのか、どんな人が集まるのか、何が起るのか、自分はそこで何をやるのか、自分が何をしようとしているのか。そのようなことも具体的なイメージは湧かず、ただ不安と緊張感と、それに加えてまあなるようになるだろうという気持ちも参加前にはあったように記憶しています。

受付のあとの最初の全体会の進行は、ただひたすら状況を見守るだけでした。どう流れても自分は大丈夫という感じもありました。ただ一度「初めて参加する方はショックを受けることもあるかもしれない」という発言が気になり、それはどのようなことを意味するのかを質問しましたが、それもその発言の直後にはなく、大分時間が経ってからでした。すぐにリアクションをおこすには周囲の様子がわからず、不安だったことと、自分でもよくその内容をかみしめてから質問したいと

考えたからだと思っています。

スモール・グループにおける最初のセッションは『ここでは何をやるのだろうか』、という疑問に尽きました。これだけ人が集まっただけで、すっかり慣れている雰囲気に参加者も、二人のファシリテーターもいるのに、「自己紹介でもするのですか?」という私の問いに、「してもいいし、別に進行は決まっていな」という答え。

一人のファシリテーターが提案した三角形の名札を各自作って自分のそばに置くという案にも、「去年もやったけれどそれはやりたくない。」という意見が出て、一体この先どうなるのだろうかという不安な思いの中、では作りたい人は作ればいい、という意見で、三名分の名札がつくられて畳の上に置かれる。

自己紹介の名乗りが二人程の人からあげられる。私自身は、自己紹介をしなかった。自分のことを説明すれば長くなるし、それに自分の口から肩書きや住所を語っても、それが私自身をよく表わすとは到底思われなかった

から。バックグラウンドによる先入観を持って欲しくなかったから。

そして、沈黙。居心地の悪い沈黙。知らない人たちの中にいるという極度の緊張感。普段の生活でなら、間をもたせるだけの会話をして、それがとぎれれば挨拶をして別れて、それぞれの方向に歩み去るであろう。しかし、ここでは歩み去ることはできない。間をもたせるとしても、六日間、十二回のセッション全部を、そんな表面上の話で過ごすことは不可能と思えた。

とにかくここではひたすら、十二名が集まって、沈黙がある。私のじたばたは、今は何をすればいいんだろうか、私の果たせる役割が何かあるんだろうか、あるとすればそれは何だろうか、周りのこうして黙っている人たちはどういう人々で何を考えているんだろうか、という焦りからだった。

誰かが会話のボールを投げる。誰かが受けとめて、また投げようとする。でも、相手のことについては、そこにいる姿とその時に発した言葉とでしかわかっていないために、受けとめそこねて相手の機嫌を損ねてしまう時もある。表面上は、別に何でもありませんよと言いつつながら心の奥の損ねた機嫌は、人に見せずにしまいかんてしまう。本音とたてまえ、それが使い分けられるのが大人、とされている社会がそこに顔をのぞかせている。

私はそこにいながら、自分の出番と役割を黙って探して探しあぐねていろいろ考えて、でもそれではダメだなどと思ってじたばたしているうちに冷や汗が出て、緊張の余り気分が悪くなったの覚えています。やがて、なんとか二時間が経過し、第一回のセッションが終了して廊下に出ると、グループのメンバーの一人が、自分も初めての参加で居心地が悪かったけれど、何かしゃべりたければしゃべりし、しゃべりたくなければしゃべらない、という気持ちでいようと思っている、と話しかけてくれました。

その言葉ですっかりふっ切れて、じたばたしていた自分と、じたばたの原因——『何かをしなればならない』という、私の中に無意識に入りこんでいた指令——に気付きました。少し前から「したい」ではなくて「しなれば」という気持ちで生きてきたそれまでの自分から抜け出ようとし始めていたのと、そこに気付いたのです。

その晩はゆっくり休んで、次のセッションからは、なるようになると自分をその場に預けて、状況にまかせて、くつろいだ姿勢をしたり目を閉じたりもできるようにって、おちついて参加していました。その後の全ての中から、感じるころのあったエッセンスだけを書き並べることにします。

セッションでは次第に「お客様」からも

「よそいき」の自分からも脱け出し、自分がどんな風にしても気にする人もないし、もし気になればなったと言ってくれるんだとかわかって安心して、その中に没入していったように思います。ただ、リラックスしていても頭の中はいつもさえたわって、状況を見聞きしていたので相当量のエネルギーを使っていたと思われまます。普段の生活で知り合う人は、仕事や勤務先やキャリア、年令、等のフィルターを通して見た私というものを理解することが多く、そして私自身も、人をそのように見るようになっていく。

ここにいる一人の人間が、こういう姿で、表情で、こう考えてこう言って、そして、このように悲しんだり笑ったり怒ったり喜んだりするんだという純粋な次元から出発して、後からその人の通ってきた道や、ふだんの生活などの外側がついていくという人の見方ができるこのようなセッションは新鮮で、私自身はとてもハッピーでした。

ですから、そこでその時、共に時を過ごすグループの人ひとりひとりについて、現在、共にそこにいるその人として考え、その人の話すことばの奥にある心をおもえばかり、それに対する自分の反応を十分に見、その上、その場にいる人々全員の心に思いを馳せてから、言いたいことがあれば言い、そうでなければ、黙ってまた次の人が言うことに耳を傾

けるという初めての試みの繰り返しでセッションを過ごしていこうとしていました。それによって、現在話されることばの奥の心を聴く、という体験をしましたし、しかもそれには、その人の自分史とでもいうものがわかれば尚更、深みが増すことも実感しました。

多分、普段の生活では、人の話をよく聞いているつもりでも、実際にはその場のその人の話を聞き、気持ちを聴くよりも、自分が何と返答をしようか、という方にだけ気持ちが流れていたのだ、焦りにも似た状態での会話がなかったと思うのです。そして、今度気付いたことは、そんな上すべりする会話の響きの浅さ。それに、心の奥まで思考を深め入れてから口に出す言葉の深い響き。体のしんから出てくることばは、聞く側にそれを受けとめる心があれば、こちらの体のしんへと響き共鳴する。それは声の大きさは別のものだということにも気付きました。

それから、沈黙の様々な種類も、実感として体験したことでした。グループの初めであまり心が伝わらない気まずさの沈黙から、次の展開への間としての沈黙。その場で話されたことばを熟考するため、また、そのことばの背景やその場の人々の心を考える時間としての沈黙。そして、ある人の言ったことばにぐっと感じ入って、余韻を味わうための沈黙。

そして、最後のセッションでは、それまでのことに思いを馳せ、残り少ない貴重な時間をかみしめる沈黙で、これには、グループの人々との共有感が強くあったように思えます。沈黙がその人を強く語ることもあることを体験し、沈黙が持つ意味の多様さと深さに畏れさえ感じてしまいます。

人が心を表現する時には、ことば、声の大きさ、間、明るさ、語調の強弱等だけでなく、姿勢や目線や表現、緊張度、真剣さ、そして沈黙、それらのすべてが語りかけているのだということを感じたことは聞くことへの新たな発見でした。これまでかなりよく聞いていると思っていた以上に、ひたすら相手の心に耳を傾けることによって自分の思い入れをしずめてゆっくりと聞き、そして心が見えてくるという聞き方があると知ったことはとても尊いことと思えるのです。

さて、一番の問題は、私にとってこの合宿は何だったのかということです。最後の全体集会では、これは私にとって出会いそのものだったと述べました。その意味は、(1)私自身との出会い、自分のことばをしっかりと全部受けとめ、消化して聞িয়েくれる人々へ信頼して、話したい時に話したいことを話し、それによって自分自身の等身大の姿に近いものを知ったこと。そして(2)人との出会い方との出会い。よそよそしく礼儀正しくするのも

なく、妙に親しくなろうと近付きすぎるのもなく、ただ自分が自分のままでいて、相手が相手のままでいて、それでいて人として純粹に心が会おうことができるという事実との体験的な出会い。そして、(3)として、そのようなあり方で実際にグループの人たちと出会ったと思うのです。

それにしてもあの六日間は一切何だったのでしょうか。何が得られるのかをそれ程考えていなかったのですが、今思うと一人の人間としての自分をかなり見ることができた気がします。私は、あの数日間で自分の中にあるものの全てを、出して生きようとしていたようです。そして、自分にあるものは、出せばいい、無理に抑えて苦しまなくてもいいし、逆に、ないものを無理に出そうとしなくてもいい、ということの人々と出会いながら経験的に知った場だったのかもしれないと思います。

そして、青い鳥を探し回って虚しい時を費すのではなくて、自分の中に与えられているものを信じて、大切にして、生かして生きたいと今思っています。それにしても「無理せず、のんびりいこうよ」というファシリテーターの方のことばに今も安心しています。

そんな意味で、この六日間は私にとって何らかの「出発」となるもののようです。出発となる根源は「出会い」、でありました。出会いという発見であり体験でした。それは、

「人というもの」との(自分も含めて)出会いということ。そして恐らくそれが核心だと思えるのです。

感激や感動といったものは時が経てば色あせて「想い出」へと形をかえていくでしょう。でもこの六日間に培ったものは、この日々の経験は、時が経つにつれて、そして磨けば磨く程、輝くだろうと思えるし、輝かせたいと思うのです。多分私は、今後もあの六日間は、何だったのだろうか、と自分に問い続けていくに違いないのです。そして、その時々の実の中で、自分の力の分だけ生きること大切にできたらいいと思います。

私は今回初めて参加した自分の視点で以上を書いたのですが、同じグループに参加した方々も、私は全く違う見方や体験をなさったことは想像に難くありません。ただ、このワークショップに参加していた方々に、また、運営して下さった方々に、そして、たまたま同じグループになった方々に、そこで共にその時その場を今として生きて下さったことに、深く感謝したいと思います。心をこめて……。



なかつぼ ちかこ  
●仙台市

## 私の今いる所

小泉周二

私がエンカウンターグループに参加した回数は、これまでに五回だと思っています。

最初は、茨城県教育委員会主催で教員が対象の『出会いグループ体験学習』というものでした。県教委の主催なので各地区から何人が出なくてはならないという感じの研修だったのですが、私は希望して参加しました。私はカウンセリングに興味を持っていた水戸市にある人間関係研究所の講座にも通っていました。

小学校から高校まで、いろいろな先生が参加していましたが、ほとんどが何の研修なのかわからずに来ているようでした。テーマを決めて話し合いをすることに慣れている先生達ですから、初めはかなり抵抗があったようでした。若い先生が失敗談などを話すと、先輩の先生が指導をするというような雰囲気も初めはありました。運動部の監督をしている先生は、「試合が近いのに……。」と、ずっとボヤいていました。それでも、最後には和気あいあいとなり、また来年会おうという話も

まとまりました。私は、このグループに参加して『自分が見えた』と思いました。それまでもやややっていたものが晴れてすっきりした感じがしました。

それから、何回か別のグループを体験し、私は、グループの中では自由でいられると感じるようになりました。何を言っても受け容れてもらえるから、自分の希望、悩み、不安などを話して最後にはすっきりして帰れるのです。これは魅力でした。

しかし、今回の清里でのワークショップでは少し違うことを感じました。グループの中でも完全に自由ではないのです。言っていることも悪いこともあるのです。(当たり前かもしれませんが)自分をさらけ出すことがグループ内の人にとっても強いショックを与えてしまうこともあるのです。そういうこともグループの大切な一部分なのだと、言う人もいるかもしれませんが、私は私をさらけ出したことによるグループ内の方々の反応が強かったことに驚きました。次にグループに参加す

るとしたら、私は少し自分を押さえねばならないだろうとも思っています。

また、清里では大切なことも学びました。それは、人にとって大きな苦しみの一つは、他の人に受け容れてもらえないことだということです。赤ちゃんは、お母さんに無条件で受け容れてもらって安らぎ、成長して行きます。これが基本です。これは大人にも通じることです。ところが、いろいろな理由で人は人を受け容れることができないことが多いのです。友達同志、親と子、教師と生徒、みな同じです。

まとまりませんが、私は今、こんな所になります。ここからまた自分と人との関係を考えて、よい関係を作って行きたいと思っています。

こいずな  
・茨城県那珂市



## 89・3 宮浜

藤崎 多佳代

初めてのエンカウンター・グループから帰って、翌日には私は、骨折の再手術のために予定通り入院しました。そのせいもあって、宮浜でのことは、言葉から遠い漠然としたものとして心の底に沈み込んでいる感があります。ひとつだけ、宮浜に関係のありそうな夢を

見ましたが、大変、印象的なものでした。『私は海の中。それも暖かな、だけど、真っ暗な水のなかで溺れもがいている。それなのに、息は全く苦しくない。そのうち片足の爪先が、一瞬、地をかすめる。もしかしたら私は斜めになっているのかもしれない。まっすぐ立つことができれば、何とか息のつけるような深さなのかもしれない。』

変な夢でした。この夢は、その後、目を覚ましているときにも、一種の同一のムードとして何度も訪れました。それは、お風呂にゆったりとつかっているときの穏やかな気分

の夢と宮浜とを結びつけてみたのですが。そもそも、宮浜にいたときも、この穏やかで心地の良い気分はありました。一度、昼間ひとりで、窓べに座って、きらきら光っている南向きの海を見ながらぼんやりしていたのですが、その時の気分と似ているのです。

言葉を相手にうまく伝え切れないもどかしさや、ずうんと心にくることも、受け止めてうなずいてくれているような海だったように思います。

E・Gに行く前、友人に「“溺れる前のワラ”を拾いに行く」と半ば冗談に言っていたのですが、今、思うと、溺れかかっている状態が、あの時確かにありました。（自覚はしていなかったけれど）

そして、今溺れてしまっていないうえに、あんなに心地の良い夢を見られたのは、きっと宮浜のおかげですね。あの時、そばにいてくれた皆さん、ありがとうございます。



# 時間を考える

“時間がない”か

小野 修

## 一、児童・生徒の個別的指導

児童臨床を仕事していると、どうしても小・中学校や施設の先生方に、個別的な指導（処遇）を、お願いしなければいけない機会が多くなります。それは、その子特有のニーズへの配慮であったり、個別の声かけの機会を多くすることであったり、個別に話をするこ

とであったりなど、さまざまです。そのようなお願いへの反応には、『個別的な指導（処遇）』という言葉の字面から来る誤解で、“一人一人の子につききりになどは、できない！”というものがあります。また、“私は、四〇人の子をみているので、一人の子だけを見るといふわけにはいかない。”とか、“集団指導の方が効果がある。”などと、個別的指導の可能性と有効性を否定するような答が返ってきます。

香川県では、何年か続けて『一人一人を大切にす教育』が、県教育委員会の最重要方針とされておりましたが、その必要性は十分理

解できるものでした。ただ、その看板を下したほどに、効果があがったかどうかはやはり疑問として残ります。

それはさておき、話を元に帰して、個別指導というこちらの意図を理解して頂ける方は、“時間がない。”ということになります。

私は、たいていはそこまで引き下がることにしてありました。唯一の例外は、私が尊敬しているある先生が、生徒指導主事をされていたときに、『先生、先生の勤務時間は八時間あるでしょう？先生には、一日二四時間あるでしょう？』と、申しあげたことがあります。その先生は、『うーん。』と唸って、黙ってしまったそうです。恐らく、後でいろいろとお考え下さったことと思います。

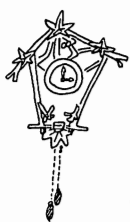
## 二、選択の無意識化

教師や施設の職員には、一日八時間の勤務時間と、一日二四時間の時間が与えられています。それにもかかわらず、私からみれば、一人の子を殺すか生かすか、その子の一生を左右しかねないほどの

重要な時期の、その子の問題解消と正常な人格発達にとって不可欠の個別指導をするための“時間がない”といわれるのは、私にとっではどうしても納得がいきません。“時間がない”といって個別指導を拒否される、その抵抗の壁をどうやって打ち破るか、それは、私にとって、何年間かの課題でした。

私の気付いたことは、『選択』ということである。即ち、“時間がないから、個別指導はできない。”というのとは、『私の勤務時間内に（あるいは、他の生活時間を含めて）、私が為すべきこととしての選択順位のなかには、個別指導は入っておりません。』ということなのです。

このような理解のなかで、もっと重要なことは、この選択が、その本人によっては意識されてはいないということです。



### 三、意識化による主体性の回復

私達は、一日二四時間をどう過ごすかについて、完全ではないにしても、自分で選択する自由をもっている筈です。確かに、生きていくためには、この選択の自由の一部を放棄せざるを得ないこともあるでしょう。しかし、この自由は、労働時間の短縮によって増加しつつありますし、多くのの人にとっては、金銭収入よりも優先する追求目的となっております。

私達は、こうした自由をもち、あるいはその自由のもとで、自分の選択した優先順位に従って、一日二四時間を使い、生きているのです。

ところが、このような優先順位の選択が、多くの場合、意識の下

に押し込まれてしまっているのです。あるいは、現在の時間の使い方以外の選択の余地がないという前提があるのかもしれない。

このように選択を無意識化することによって、日常生活のなかで、“時間がない。”の連発が可能になるのです。

しかし、考えてみれば、この『自分の時間を、どのような優先順位に従って使うか。』という選択は、私達の人生にとって、極めて重要な意味をもつものです。一日二四時間をどう使うかという選択の積み重ねは、一月をどう過ごすかの選択であり、一月をどう過ごすかの選択の積み重ねは、一年をどう暮らすかの選択であり、一年をどう暮らすかの選択の積み重ねは、一生をどう生きるかの選択でなくてはならない筈です。

このような選択を無意識化してしまうということは、このような選択を放棄することにはならないでしょうか？少なくとも、自分の人生をどう生きるのかを意識的に選択するという主体性の放棄ではありません。

ただ、『選択』は、いつも難しいものです。その選択の結果の責任を自分自身で背負うという責任を伴います。だから、“選択とか意志決定をしないことによって、結果の責任を免れる。”という、気楽な道を選びたいという誘惑に、私達は、常にさらされることになります。

人の長い人生は、多くの困難な選択を強いてきます。人生には、多くの岐路があり、どの道を行くかの選択なしには済ませられません。私は、自分の時間をどう使うかの毎日の選択が、このような困難な選択の練習問題を与えてくれるようにも思いますが、どうでしょう？

自分の時間の使い方の方の選択を、無意識の世界から引き出して、意識化することが、自分の人生をどう生きるかの主体的選択につながるように思います。



## 四、社交上の効用

“時間がない。”という表現は、しかし、私達の社会生活を円滑にするという効果があります。

“忙しい生活をしている。”ということは、現在人々がお互いに認めあっている暮らし方です。そこから、“時間がない。”という表現は、人々を納得させやすい、断りや拒否の決まり文句として、非常に通しやすくなりました。こういう効用は、十分利用の価値がありましよう。このような生活の知恵が生んだ表現かもしれません。

ことさらに、『あなたのお申し出は、私のしたいと思う選択順位では、時間にとれません。』などといって、カドを立てる必要もないでしょう。

## まとめ

“時間がない。”という表現は、だれもが一日二四時間をもつことからすれば、矛盾した表現である。

これは、時間をどう使うかの選択を無意識化し、人生をどう生きるかの主体的選択の放棄につながる。この選択の意識化によって、主体的な生き方が可能になる。

しかし、このような表現は社会生活の円滑化の効用はある。



● おのおさむ  
徳島文理大学

## 人間関係研究会刊行資料

- |       |                           |  |                     |
|-------|---------------------------|--|---------------------|
| Na 1  | 畠瀬 稔                      | 身体接触を伴う人間関係促進の一技法 (改訂増補), 1972                         | (価 200円 円120円…40g)  |
| Na 2  | 小野 修                      | 自分がよみがえった エンカウンター・グループへの参加経験, 1971                     | (価 200円 円120円…40g)  |
| Na 3  | ロジャーズ, 1967 (小野 修訳)       | 学校組織の主体的変革のための計画, 1971                                 | (価 200円 円120円…45g)  |
| Na 4  | 畠瀬 稔                      | エンカウンター・グループについて 来談者中心療法の行動科学的発展<br>(「教育の医学」18巻1号より転載) | (価 200円 円120円…30g)  |
| Na 5  | ジェンドリン&ビービー, 1968 (小野 修訳) | 体験グループ グループのためのインストラクション (増補改題), 1972                  | (価 200円 円120円…40g)  |
| Na 6  | 北島 丕                      | 高校生のためのグループ・カウンセリング, 1976                              | (価 800円 円240円…180g) |
| Na 7  | 増田實, 東山紘久, 清水信介           | ラ・ホイヤ・プログラムへの参加経験, 1977                                | (価 200円 円120円…40g)  |
| Na 8  | 畠瀬 稔                      | 企業における人間関係の改善について エンカウンター・グループの導入                      | (価 200円 円120円…30g)  |
| Na 9  | 渡辺 忠                      | 職場のチーム・ビルディング 人間中心の組織づくりのために, 1985                     | (価 300円 円170円…60g)  |
| Na 10 | ナタリー・ロジャーズ (坂川雅子訳)        | 母と私 鏡の中を覗いて 『生まれ変わる女』より                                | (価 200円 円120円…35g)  |
| Na 11 | 小野 修                      | 問題をもつ子どもの親たちのグループ —臨床家のためのマニュアル—, 1988                 | (価 300円 円240円…105g) |
|       | 野島 一彦                     | わが国の「集中的グループ経験」に関する文献リスト, (1970~1980)                  | (価 400円 円170円…60g)  |
|       |                           | (福岡人間関係研究会資料 Na11)                                     |                     |
- ご送金は、郵便振替 東京 9-37428 まで (¥1,000以下は、切手可)

申し込み先：人間関係研究会事務局

〒145 東京都大田区上池台 1-34-26 渡辺方 TEL. (03) 729-3622 (20時~23時)

# シリーズ・日本グループ紀行

## 九州におけるエンカウンター・グループ

—— 北部九州 ——

高 松 里

### 一、はじめに

九州全体を見ると、グループ（エンカウンター・グループ）が最も盛んなのは福岡県である。佐賀県にも継続グループが存在しているが、熊本県や大分県、宮崎県には、多分グループを企画・主催する団体はない。鹿児島県では過去に集中型ワークショップが開

かれたことがあるが、現在どのような活動が行われているのか、残念ながら福岡まで情報が入って来ていない。

従って、本稿は「九州における」とテーマには挙げたが、実際には福岡県・佐賀県での動きを、筆者が知り得る限りにおいて、記述したものであることをあらかじめお断りしておきたい。

さて、福岡県でのエンカウンター・グループ

（および各種グループ）の実践／研究は盛んに行われているが、特に約二十年の歴史を持つ「福岡人間関係研究会」（代表・村山正治氏）がその中心となっている。この研究会とその人的ネットワークに支えられた小さなグループの活動が、福岡県／佐賀県におけるグループの実践を幅広く進めている。

福岡人間関係研究会の主な活動は、①「月例会」の開催、②合宿集中型ワークショップ

の開催、③「エンカウンター通信」の発行、の三つである。一年間の参加者は、実数で百名以上ある。また、この研究会に出入りしている実践家／研究者の数は多く、それぞれが独自のワークショップや継続グループなどを行っている。そのため、年間どの位のグループが行われているのか正確な数字はつかみにくい。

研究者では、九州大学の村山正治氏が第一世代ともいべき存在で、福岡大学の野島一彦氏、中村学園大学の安部恒久氏が第二世代、九州大学助手の申栄治氏や私が第三世代ということになるだろう。第四世代となるとまだ、はっきりしないが、毎年申氏が学生を対象にワークショップを開いているし、学部学生の自主的な動きも見られるので、今後また研究者が生まれてくることが期待されている。

実践家では、上に挙げた人々の他に、中学校・高校の教員が多い。彼らは、臨床心理学についての専門的訓練を何らの形で受けており、福岡人間関係研究会に参加し、メンバーとしての体験を積んだ人々である。

これらの人々を中心として、福岡県・佐賀県・長崎県・大分県など各地で、様々な実践が行われている。

ら由来するTグループの実践も行われると話には聞くのだが、筆者はその実際を知らないために、今回は割愛することにした。

## 二、継続型グループ

昨年、日本心理学会のシンポジウムでも発表したが（高松、一九八八）、福岡近郊でのグループの特徴としては、継続型グループの人的ネットワークのもつポテンシャルを利用して、種々の合宿が行われていると私は考えている。

さて、現在福岡市内で開かれている継続グループは、私が知っているだけで、三つある。先に挙げた「福岡人間関係研究会」が最も大きなネットワークで、毎月最終土曜日、午後三時から六時までがセッション（話し合い）で、その後同じ会場で九時位まで二次会（飲み会）。その後は「中洲」や「天神」へ飲みみに出る、というパターンが普通である。参加者は二十名から多いときは三十五名位。年令層や職業がバラバラであり、これは他の小さなグループが比較的同質集団であるのに対して、際立った特徴となっている。ある意味では、まとまりには欠けるが、とにかくいろいろな人が来ているグループである。

次に、「月曜会」であるが、一九八二年に学生を中心として開始され、現在八年目に入っ

ている。毎週月曜日、午後六時半開始で九時まで。平均年令が二十代後半で、男女はほぼ半数。学生と社会人およびその中間（プー太郎）がメンバーを構成している。参加者はほぼ増減なく、十名程度に保たれているが、メンバーの出入りも割りとある。益暮れ正月クリスマスに関係無く、年中無休が特徴である。「準喫茶／タイヒ」（誤植ではない）は、月三回、土曜日に開かれる喫茶店である。マンションの一室が店舗であり、福岡人間関係研究会のメンバーの一人（池見隆雄氏）が、マスターとなつて始めた、喫茶店風グループである。最も集団構造がゆるやかなグループで、開店時間内ならば、いつ行ってもいつ帰っても良い。マスターは相当コヒーに凝っているので満足できる。ちょっと話して帰ってくる、という気軽さが特徴である。参加者は入れ代わりで七〜八名。平均年令は三十代半ば位だろうか。

以上が福岡市内のグループであるが、他の地域にも、いくつかのグループがある。「佐賀人間関係研究会」、「Mimi Encounter Group (MEG)」、「久留米ホットラインデスカッション交友会」などは、それぞれ歴史も古く独自の活動をしている。これらの会は基本的に全く独立している。活動計画について一堂に会して話し合う、というような公式の連絡網はもっていない。しかし、メンバー

はこれらのグループに流動的／重複的に参加しており、自然に他のグループの活動についての情報は入ってくる。

多分、このあたりのグループ間の交流の仕方が、福岡で継続型グループが成功しているキーポイントであろうと思われる。それぞれのグループは、他のグループにはない特徴を持っている（年令や職業、雰囲気など）ため、特に競争的になることもなく、それぞれ好きにやっている。また、百万都市である福岡と適当に離れた中規模都市がネットワークを組んでいる、という物理的な距離も好条件となっている。

ところで、これらの会のキーパーソンがほぼ福岡人間関係研究会のメンバーでもある（あった？）こと、発足にあたりモデルとしたのがやはりこの研究会であったらうことを考えると、ネットワークとしては、このグループが上位ネットワークであると言えると思う。

また、さらに過去にも、別の継続グループも存在していた。「下宿エンカウンター」、「サンデー・エンカウンター」、「火曜会」、「土曜会」などが試みられてきた。継続型グループは、必ずしもいつもうまくいくわけではない。ただ、解散にいたる原因の一つとして、「抱えている問題の大きなメンバーの参加」ということが挙げられると思う。メン

バーの参加資格は問わないのが普通だが、これが良いかどうかは一概には言えない。

それでも、現状では、各会の活動は活発である。ロコミのネットワークはうまく生かされているようである。

### 三、合宿集中型ワークショップ

合宿集中型ワークショップ（以下、ワークショップと略す）は、一般募集のもの、看護学校などの研修型のもの、学生グループなど、様々な形態のグループが試みられている。

#### ① 一般募集のワークショップ

これには、夏の「七里田（しちりだ）エンカウンター・グループ」と、冬の「九重（くじゅう）エンカウンター・グループ」の二つがある（共に福岡人間関係研究会主催）。以前は、どちらのワークショップも全国ネットの「人間関係研究会ワークショッププログラム」に掲載をしていたのだが、現在は、冬のグループだけ全国に募集している。というのは、数年前、「対外的なサービスではなく、自分達のためのワークショップにしたい」という声がメンバーから出て、それ以来、内部の機関紙（エンカウンター通信）で参加を呼び掛けるだけになっている。それでもロコミなどで参加希望者は多い。開放的なのんびりとし

た田園地帯で行われる夏、時に雪に閉ざされる阿蘇九重国立公園でかなり集中して話し合いが行われる冬、それぞれに特徴があり、参加者も好みがあるようである。

この他、福岡人間関係研究会が主催したワークショップとしては、昨年は竹内敏晴氏を迎えて実施されたボディワークを中心とした合宿、およびその「おさらい会」が企画され、共に好評であった。

また、各地の継続グループが主催するワークショップの数も多い。例えば、「福岡人間関係研究会」「月曜会」のネットワークを利用したワークショップが、昨年だけでも数多く行われ、時には一泊程度の合宿が毎月行われていたこともある。これらのグループは、継続グループの誰かが言い出しっべとなり、「フォーカシングがしたい」などテーマを挙げて、ロコミで参加者を募集し、短期間の準備により開催されるのが特徴である。非常にフットワークの軽いグループである。

#### ② 研修型ワークショップ

これは、看護学生、看護婦、養護学校教員などを対象とすることが多いが、その他、高校生のボランティアリーダー養成などが実施されている。数泊する合宿型が多い。最近では、構成型（ゲーム）のグループが多くなっており、目的に応じて（仲間作り、対人関係訓練、

リーダー訓練など）エクササイズを組み合わせて用いている。福岡では、研修型ワークショップはかなり定着して来ている感がある。これらは、他の団体が開催し、我々が雇われて出掛けるという形が多い。年間の総数は分からないが、筆者は年間に三、四グループを担当しており、それから推測すると、年に十五、二十位のワークショップは行われていると思われる。

#### 四、おわりに

以上のように、福岡周辺における各種のグループは、地方都市の利点を生かし、それぞれ独立して、エンカウンター・グループなどを企画している。また、このような地道な積み重ねが評価され、様々な研修も行われている。現在は、グループの定着期というイメージがある。熱狂的なムーブメントとしての激しさやハデさはないが、静かにこれからの方向を改めて探求しているようである。

筆者の考えとしても、グループが熱狂的に流行することは、好ましいことだとは思えない。ファシリテーターもきちんと育てるプログラムが必要だし、「グループはこうありたい」というビジョンも共通に持っていたい。第四世代がこれから育って来て、どんな風にグループを変えていくのが、今は楽しみである（…と妙にオジンくさくなっちゃった）。

たかまつ さとし  
九州大学留学生教育センター

## 香川県におけるグループ・アプローチ

瀬島 俊秋

### 一、香川における

#### カウンセリング研究組織の歴史

まず、グループ・アプローチと関連のある

カウンセリング研究組織の歴史について概観してみよう。

昭和三六年から約十年間、「香川カウンセリング研究会」という組織があり、大西寧（大西病院）を会長に、小野修（現・徳島文

理大）、橋詰ユキノ（香川日赤病院）、吉尾直純（現・瀬戸内短期大学）、小西英夫（県立香川中部養護学校）らが所属していた。年に一回研究会誌「カウンセリング」も発行しており、昭和四〇年五号の名簿には、教育・福祉

・医療・産業・司法矯正関係者ら八十余人が会員として名を連ねている。その活動の一環として昭和四〇年には、友田不二男を招いて県内でカウンセリング・ワークショップを行っている。私の知る限りこの年が香川のグループ・アプローチ元年である。

同じ頃、松山、高知、徳島においても日本カウンセリングセンター主催のカウンセリングワークショップが開催され、四国においてカウンセリングの学習が盛んにおこなわれていたことがうかがえる。

ところが、この会は四五、六年ごろに解散し、それから十年近く不毛の時代が続いた。

昭和五五年には香川県高校教育研究会教育相談部会が活動を始めた。同時にこの部会は「香川学校カウンセリング研究会」という名称で全日本カウンセリング協議会に所属し、準カウンセラーの認定を行ってきた歴史を持っている。このグループは笠井則男（現・高松東高校）を中心として昭和五五年から年一回、夏の研修にE・Gを実施している。当初は三泊四日をかけて小豆島、琴平などの会場で開催し、ファシリテーターには星野命（国際基督教大学）、加藤忍（大阪キリスト教短期大学）らを招いていた。

しかし、この会も昭和六十年頃には活動が沈滞化していた。そこで、学校カウンセリング研究会を発展的に解消し、広く一般の人も

対象にして新しく「香川カウンセリング研究会」(新)が発足した。これは昭和六二年五月のことであった。

小柳晴生（香川大学）を会長として当初は八人だった会員も現在では七〇人を越すようになり、この分野に対する社会の期待を強く感じる所以である。

## 二、香川における グループ・アプローチ の活動状況

筆者の知識不足からグループ・アプローチの分類・整理が十分にできなかったので、宿泊・非宿泊別にまとめることにした。読者諸兄の便宜を図るために各グループの形式や対象者、内容、スタッフなどについておおまかに記載した。各グループの連絡先を末尾にリストアップしたので、参考にされたい。

また、人名については敬称を略させていただいた非礼をお詫びしたい。

### (一) 宿泊形式のグループ

人間関係研究会のエンカウンター・グループ

小野修（前出）は昭和四五年から西日本各地で行われていた人間関係研究会主催のE・

Gに参加していたが、四九年十一月二〜四日に県内で、谷口正己（現・神戸学院女子短期大学）・足立明久（現・京都教育大学）とともに、E・Gを主催した。以後毎年実施し、平成元年までに十回を数えている。

昭和六十年からは小柳晴生（前出）がスタッフに参加したが、この頃から「ゆったりした時間を過ごす」という基本理念を打ち出している。

場所は六十年から小豆島に近い余島という静かなブライベイトアイランドに移した。島に点在するキャビンでの生活や、バーベキュー、釣りなどのプログラムを取り入れるなど、日常の疲れをいやし楽しめるE・Gを目指しているとのことである。

対象者 一般（十五名）

内容 ベーシック・E・G

期間 二泊三日

香川カウンセリング研究会のE・G

前出の（新）「香川カウンセリング研究会」は、二ヶ月に一回、都合年六回の定例会を開いている。このうち、八月と二月の二回を一泊二日のエンカウンター・グループで行っている。

一泊という短い期間だが、毎回二十名近い参加者があり、様々な話題が出され、活発な

話し合いが行われている。参加者の多くは、心理臨床の専門家ではないが、地域にカウンセリングマインドを育てる働きや、相互の心理的成長や援助に役立っている。

対象者 研究会会員

内容 ベーシック・E・G

期間 一泊二日

スタッフ ファシリテーターとして毎回小柳

晴生の他、参加者から研修を兼ねて希望者を募っている。

香川県高校教育研究会教育相談部会の研修におけるE・G

この会では、昭和五五年から星野命（前出）らを招いてワークショップを開催していたが、昭和五九年から小野・小柳がファシリテーターとなり、一泊二日で実施するようになった。初めはグループ経験者が少なく、とまどったが、回を重ねるうちに複数回参加者も増えてE・Gのオリエンテーションの機会となっているようである。参加者が年々増加しているが、その中でも養護教諭の占める割合が大きくなっていることが注目される。登校拒否問題がクローズアップされている今日、貴重な体験学習の場となっている。

対象者 香高研相談部会の会員

内容 ベーシックE・G

期間等 八月の例会として行っていて、一泊

二日の日程である。

スタッフ 前述の他、村上昭史（香川県リハビリテーションセンター）

香川大学 グループ合宿「自己との出会い」

香川大学保健管理センターの小柳晴生を中心として昭和六十年から始まったこのE・Gは「新・遊・感・生活へのパスポート」、「探しています 新しい自分の生き方」をキャッチフレーズに、学生の自己探究や自己確認の機会を提供するために行われている。

対象者 香川大学全学生

内容 ベーシック・E・G

期間 毎年三月に三泊四日（平成元年からは二泊三日で実施）

スタッフ 岩村聡（広島大学総合科学部学生相談室）・後藤見知子（大川総合病院）・村上昭史（前出）・国井正昭（香川県児童相談所）・中條千枝（香川大学厚生課）

(二) 非宿泊形式のグループ

県児童相談所の「親子教室」および「登校拒否児の親の学習会」

児童相談所では障害児の福祉対策として昭和四九年より三才児検診や外来相談で精神薄

弱児・自閉症様児と認められた者について「親子教室」を実施している。

子どもはブレイルームで職員が療育を行う一方、その親は職員を交えてグループカウンセリングをするといったものである。親たちは自由な話し合いの中で情報交換をしたり、自分の「話したい」気持ちを満足させたりする。なお当初は引っ込み思案の子どもとその親を対象にした教室もあり、治療キャンプを実施していたことである。現在は、治療キャンプは登校拒否、かん黙、触法行為等の不適応反応を起こしている児童を対象に二泊三日で実施している。

また昭和五二年からは、登校拒否の子どもを持つ親たちの学習会を実施している。親への援助によって親子関係の改善や子どもの成長を促していくもので、一回の学習会は児童相談所の担当者との個人面接、グループ学習（E・G形式）、児相担当者会というプログラムからなる。この会は、前所長の小野修の研究的な実践によって、その基礎が確立されたもので、全国的にもさきがけとなった活動である。

◎こじか教室

対象者 学齢に達するまでの精神薄弱児と

その親

内容 親の話し合い

子どもの療育



期間等 毎週木曜日の午前

四か月間で一教室が終了し、年間二回開催される。

◎さくらんぼ教室

対象者 学齢に達するまでの自閉症様児と

その親

内容 こじか教室と同じ

期間等 毎週月曜日午前、午後

四か月単位でメンバーが変わるのはこじか教室と同じ

◎さくら教室

対象者 さくらんぼ教室の経験者で子ども

の就学後も集まりたいという希望があり、小学生のグループと中高生のグループに分かれて集まりをもっている。

内容 他の教室と同じ

期間等 今年度からは年間四回開催されている。(昨年度までは五回)

◎登校拒否児の親の学習会

対象者 登校拒否児を持つ親

内容 ベーシックエンカウンターを基本にする。

期間等 毎週火曜日の午後(個人面接一時間、グループ学習二時間、児相担当者一時間)

一二次の学習を一単位とする。

野口新子によるE・G

元高校教諭の野口新子(現・丸亀市少年育成センター)は笠井則男らと高校の教育相談部に所属していたが退職し、自らカウンセリングルームを開いて相談活動を展開している。昭和六三年度からは専門相談員として少年育成センターに勤務するかたわら、多彩な活動を行っている。

野口は小野修の「登校拒否児の親の会」にしばらく参加した後、昭和六一年から「登校拒否を考える会」と「自分の生き方をゆっくり話し合う会」を始めた。

前者は六三年まで続いた。後者は六二年から「自分を語る会」と名称を改め、現在に及んでいる。この会の案内の資料から少し抜粋してみる。

「生まれた時は『快』『不快』の感覚ははっきりしていて感覚と表現は一致していました。それなのに『快』『不快』さえ分からなくなるのはなぜでしょう。……私達は小さい頃から体の感覚ぬきで『ねばならない』というイメージばかりで生きてきませんでしたか。イメージは現実を無視していくらでも理想に近づきます。高い理想はブライドを作り、劣等感を作り、現実の自分を嫌いにさせて否定します。勇気をもって現実を見ませんか！関わり

を通して、からだの感覚を感じませんか！」  
なお平成元年一〇月からはヨーガと組み合わせたE・Gを始める予定とのことである。

◎「自分を語る会」

対象者 一般

内容 参加者がお互いに自分自身を語り合うことを基本とする。

期間等 隔週金曜日(高松会場)

隔週土曜日(丸亀会場)

県精神保健センターの「親の会」

昭和六二年八月から子どもの問題で悩む親が集まって話し合う会が始められ、毎回六、八名が参加している。困っているのは自分の家の子だけと思っている親が多いが、他の家庭の話聞くことにより、心がほぐれ子どもへの見方も暖かくなっていくという。参加者は登校拒否の子どもを持つ親が多く、お互いが精神的な支えになっている。

参加者が増えてきたので子どもたちの学校種別に、中学生の部会と高校生の部会に分ける予定とのことである。

対象者 子どもたちの問題を持つ親

内容 子どもについての悩みを話し合う。

期間等 毎月第三火曜日の午後  
スタッフ 現在までに花岡正憲(センター所

長)、富田美恵子(センター保健婦)、

小柳晴生が担当してきたが、現在は富田、小柳である。

### 「親業」の活動におけるE・G

現在香川県では三人のインストラクターが活躍する親業 (Parent Effective Training) においても、E・Gが行われている。十～二十人の希望者が集まると約二か月にわたる講座を開く。

話を聞くことを中心としたプログラムによって構成されているが、これはロジャーズのカウンセリング理論をもとにしたものである。

なお県下では森本雅栄が昭和五六年に始めて以来、今年で九年目を迎えている。

#### 対象 一般

内容 主にE・Gを中心としたプログラム  
期間等 一週間に一回で八回をもって一回の講座となる。

### 一般企業の行うE・G

香川の新しい動きとして企業が行う研修グループがある。

高松市に本拠を置く四国電気工事株式会社では、当初社内向けの講座として行っていたものを一般にも「四電工ビジネススクール」

として開放している。

今年度の資料によると「自己啓発セミナー」の八つのコースの中に「自己成長のための対話分析(TA)コース」と「親と子のための勇気づけ(STEP)セミナー」が見られる。

### ◎自己成長のための対話分析(TA)コース

#### 対象 一般

内容 二日間のプログラムから主なものを挙げると、自我状態分析、三つの私、意欲づけ対話分析、人生観、心理ゲーム、四つのポジション、問題解決法、真実な関係、脚本分析、人生設計、などである。

期間 十月二八日、二九日(通いで二日間)

### ◎親と子のための勇気づけ(STEP)コース

#### 対象 一般

内容 資料によるとSTEPとは、Systematic Training for Effecting Parentingの略で「子どものやる気を効果的に引き出す、親になるための順序立った訓練」という意味である。

これまで原稿作成のために取材を重ねてきたが、十分に県内のグループの歴史と現状を調査して正確に記述できたとは思われない。中には実情と異なる場合があるかもしれない

が、どうかお許しいただきたい。その場合は私の方までご一報下さるようお願いする。

### 各グループの連絡先

#### ◎人間関係研究会

小柳晴生 本誌の編集事務局として最後のページに掲載

小野 修 〒767 三豊郡高瀬町大字上高瀬1112-2

#### ◎香川県精神保健センター

〒760 高松市松島町1丁目17-28

TEL (0878) 31-3151

#### ◎香川県児童相談所

〒760 高松市西宝町2丁目6-32

TEL (0878) 62-8861

#### ◎香川大学保健管理センター

〒760 高松市幸町1-1

TEL (0878) 61-4141

内線 231、275

#### ◎香川県高校教育研究会教育相談部会

〒769-23 大川郡寒川町石田東甲10

65 県立石田高校内

TEL (0879) 43-2530

#### ◎香川カウンセリング研究会

〒769-21 大川郡志度町志度4139

1100 瀬島俊秋

#### ◎野口新子



○筆者連絡先  
「香川カウンセリング研究会」の連絡先と  
同じ

◎四電エビジネススクール  
〒760 高松市松島町1丁目11-22  
四国電気工事株式会社内  
TEL (0878) 34-1111  
内線322 (担当 榎田)

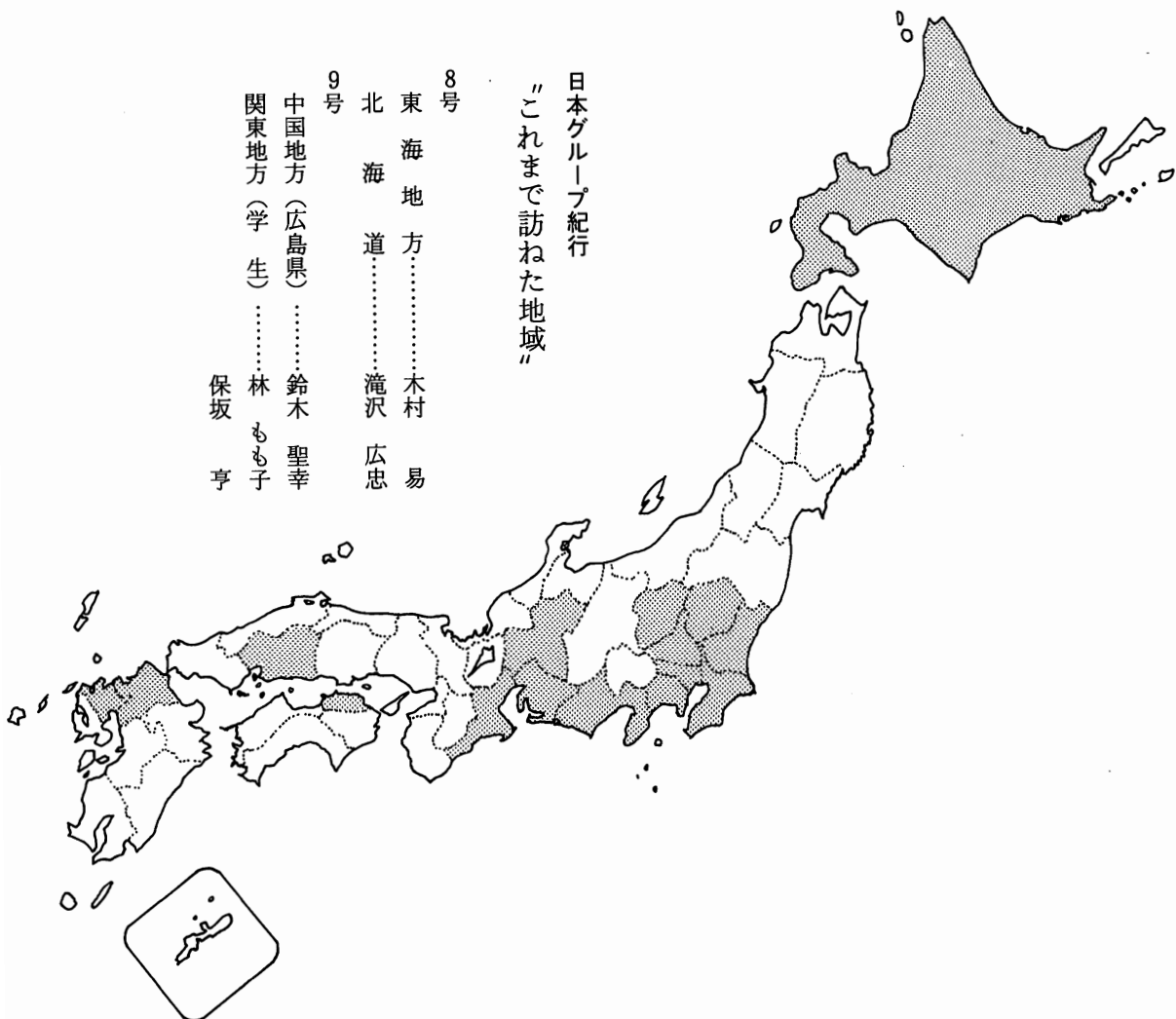
◎親業 (森本雅栄)  
11 〒761-01 高松市高松町帰来207-1

21 〒763 丸亀市大手町2丁目1-20  
丸亀市少年育成センター  
TEL (0877) 22-6886  
自宅 〒763 丸亀市中府町3丁目7-1

日本グループ紀行

“これまで訪ねた地域”

8号 東海地方……………木村 易  
北海道……………滝沢 広忠  
9号 中国地方 (広島県) ……鈴木 聖幸  
関東地方 (学生) ……林 もも子  
保坂 亨



## 関連機関の紹介

社団法人茨城県商工経済会

### 人間関係研究所

人間関係研究所は、働く人々やその家族のためのメンタル・ヘルス・サービス機関として、昭和五十五年四月に、社団法人茨城県商工経済会の内部機関として設置されました。母体である茨城県商工経済会は、昭和三十年にできた経済団体で、現在は水戸駅南にある茨城県産業会館の十四階に入居しています。会員数は約二百社余りです。

人間関係研究所の運営は、法人会費、公的助成金などによって賄われています。活動の中心は、カウンセリング活動で、産業会館一四階に、常設の心理相談室を設けています。相談には三人のカウンセラーが応じています。相談日は、日曜祭日を除く毎日、午前十時から午後七時まで（土曜日は午前中のみ）となっています。建物の構造上制約があり、プレイルームがとれないので相談受付は、原則として中学生以上の方にしています。相談には前もって予約が必要です。

第二の活動としては、月一回のカウンセリング講座があります。毎年十月に開

講し、一年単位で行われています。この講座は、カウンセリングの学習を通して、日々の人間関係を考え直したり、自己理解を深めたりするためのヒントをつかんでいただくことをねらいとして開かれています。

その他、年二、三回のエンカウンター・グループや、講演会なども行っています。（文責・小沼京子）

連絡先…(財)茨城県商工経済会 人間関係研究所 〒三一〇 茨城県水戸市桜川二二二一三五  
☎ 〇二九二一（二五）一八五八〇

一九八九年度人間関係研究会  
ワークショップの御案内  
二月から三月にかけて全国各地で四プログラム開催

今年度も残り少なくなりましたが、二月には広島（宮浜）での「自己発見への内なる旅」、三月には神奈川（足柄）「学生のためのエンカウンター・グループ」、滋賀「琵琶湖畔プログラム」、愛知（岡崎）「ゲシュタルト・ワークショップ」が用意されています。どうぞご参加ください。

九十年プログラムは、三月にできま

す。過去二年間の参加者には研究会から送付しますが、宛先不明で返送が多くあります。住所など変更された方はお知らせください。プログラム御希望の方は、七十円切手を同封の上、左記までお申し込みください。

▼申し込み先…〒一四五 東京都大田区上池台一―三四―二六渡辺方 『人間関係研究会事務局』  
☎ 〇三―七二九―三六二二（二十時～二十時三時まで）

郵便振替番号…東京九―三七四二八



### 購読申し込み方法

購読は、原則として定期購読制です。年間購読料は、一五〇〇円（送料込み）です。No.11からお申し込みの方は、右記年間購読料を、郵便振替か現金書留にて編集事務局宛お送りください。単品購入希望の場合、送料および購入方法は左記バックナンバーと同じです。

### バックナンバーの購入方法

No.6、7、8、9は残部があります。ご希望の方は、各号の合計代金に郵送料

を加えた金額を、郵便振替か現金書留にて編集事務局までお送りください。

郵送料は、1冊まで250円、3冊まで300円、5冊まで350円、8冊まで400円です。これ以上の場合、連絡いただければお知らせします。

No. 6	(1987年12月発行)	52頁…500円
No. 7	(1988年7月発行)	46頁…600円
No. 8	(1989年1月発行)	62頁…600円
No. 9	(1989年7月発行)	52頁…600円

バックナンバーの内容などを紹介した「購読案内」を作りました。ご希望の方は、編集局まで。

■次号の案内…十一号は平成二年七月発行予定、四月末が原稿締切です。E・Gでの体験、研究レポート、本の感想など、各地の活動や会の紹介など、お気軽に編集事務局までお寄せください。また、本誌についてのご意見・感想もお寄せください。

■編集後記…ついに念願の特集を組むことができました。いかがでしょうか。反面、情報欄が手薄になり反省しています。これからも魅力的な雑誌になるよう心がけます。(H&K)

■10号編集委員…木村 易・野島一彦

(編集事務担当) 小柳晴生

■購読申し込み先…〒761-01 高松市星島中町383-3・507『ENCOUNTER 編集事務局』小柳晴生・欣子  
☎0878(43)-6444

購読申し込みには雑誌添付の郵便振替用紙をご利用ください。郵便局備え付けの振替用紙をご利用の場合には、次の番号・加入者名をご記入ください。

▼郵便振替

振替番号…徳島 8-36521

加入者名…人間関係研究会編集事務局



## 人間関係研究会について

人間関係研究会は、エンカウンター・グループを中心とした人間関係の改善と促進の方法についての研究と実践を目的として、1970年春に発足しました。この研究会は、人間関係の分野に関心をもつ研究者と実践家が閉鎖性をうち破り、新しい人間関係をもとに組織と集団や個人生活のあり方に、より真実で創造的・建設的なものを求めることを課題としています。人間関係こそは、私たち人間の生き続ける限り、世界・国家・社会を通じての大きな課題であり、障壁・闘争・破壊につながると同時に、成長・建設・福祉への道でもあります。この新しい分野に関心をもたれる方々が、この研究会を利用し、経験と知識を交換しあうことを希望しています。

---

# ENCOUNTER

出会いの広場 No.10



発行所 人間関係研究会 1990年1月20日  
〒145 東京都大田区上池台1-34-26 (渡  
辺方) 編集事務局 〒761-01 高松市屋島  
中町383-3・507 (小柳方)  
印刷 株式会社美巧社 高松市多賀町1-8-10

---

---

# ENCOUNTER

## No.10 1990. 1

### CONTENTS

---

#### Special Series : The Effect of Encounter Group in the Education

- Encounter Group in the Teacher's Education .....Kazuhiko Nojima  
Introduction of Encounter Group  
for Health Care Teachers in Public Schools .....Nobuhiko Nagahara  
Encounter Group in the Nursing Education .....Masako Suzuki  
The Effect of Encounter Group  
in Campus Life .....Kenji Saito, Haruhiko Simoyama  
The Key Experience in Encounter Group  
when I was a Student .....Syunsuke Yamada  
Encounter Group with High School Students .....Hiro Seki

Gestalt Therapy Training Program in U. S. A. : .....Yasuyuki Fukui  
My Experience at Beginning Period

#### The Beauty of Encounter (7)

Hino Seki The Most Humanistic Person in Kanazawa City ...Naoko Hatase

#### Communication Bulletin

- Psychic Scenery beyond the Words .....Isao Mizuta  
Recollection of Kiyosato Encounter .....Chikako Nakatubo  
Here Now I Exist .....Syuji Koizumi  
Experience of Miyahama Program .....Takayo Fujisaki

The Meaning of Time for Clinical Psychologist : Part III .....Osamu Ono  
Does Modern Japanese have Enough Time to Appreciate It ?

#### Group Journey around Japan

- Encounter Group in Kyusyu, Fukuoka Prefecture .....Satosi Takamatu  
Group Approach in Kagawa Prefecture .....Tosiaki Sejima

#### Information

---

Edited and Published by

JAPANESE SOCIETY FOR THE PERSON-CENTERED APPROACHES

Editorial Office : c/o Haruo Oyanagi, 383-3 Suite 507,

Yasima Nakamachi, Takamatsu City, Kagawa Prefecture,

761-01 Japan

Central Office : c/o Tadasi Watanabe, 1-34-26, Kamiikedai,

Ohtaku, Tokyo, 145 Japan

---